The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈特別エッセイ〉 VI. 玉井教授の教え子の方々より
Author(s)	
Citation	Osaka Literary Review. 2010, 48, p. 192-282
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25352
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

VI

（玉井教授の教え子の方々より）

笑顔の秘密は「これでいいのだ」？

服　部　慶　子

玉井暲先生が阪大の文学部に赴任して来られたのは私が大学院の博士課程に入った年だった。それ以前に川口能久先輩の忘年会などでご一緒したことのあった優しい先輩が「先生」となられたのだった。以来、玉井先生のあの柔らかな笑顔は今に至るまで変わることなく、お顔も髪型もそのままなので、もうあれから四分の一世紀もたってご退官の年になられたという事実に驚愕する。

先生の最初の年の演習はシェリダンの『悪口学校』で、私はそれまで18世紀の戯曲を読んだことがなかったのでとても新鮮だった。ロマン派あたりの詩を研究していた私にとって、「スネイク夫人」とか登場人物のネーミングの滑稽な響きが面白かった。先生のご専門はワイルドなのに、あえて守備範囲外の18世紀の作品を選ばれたという。当時の *O. E. D.* にはもちろんCD-ROMはなく、まだ旧版の分厚い12巻本で、予習するには一冊ずつページをめくって単語を調べ、該当すると思われる定義は手書きでノートに写さなければならず、幸運にもテキストからの引用が見つかれば大喜び、という時代であった。あの重い *O. E. D.* を引きまくって腰を痛めたら一人前というジョークがあったぐらいだ。何代か前の教授の演習では冠詞と代名詞以外の単語は全部 *O. E. D.* で定義を調べなければならなかったそうなので、その時に比べれば、これはと思う目星をつけた単語だけ調べればよくなったので労力はずっと軽減されたという。とはいっても *O. E. D.* を使っての予習は重労

働には違いなく、単語によっては似たような定義が延々と何ページも続いているので各定義の微妙な差異を読み解くのが一仕事だった。*O. E. D.* の定義の解釈をすることで英文の読解力がついたのでなないかと思える。当時の一週間は演習の授業を中心にまわっていたと言っても過言ではなく、*O. E. D.* は物理的にも精神的にも重い存在だった。

CD-ROM を使えば引用も簡単に見つけられ、定義も切り貼りで印刷することができるようになった今では、その時代が懐かしく思われる。当時はワープロ専用機が 30 万円ほどの高価格で一般には普及しておらず、院生のなかでワープロを持っていたのは一人だけだった。文章の修正や組み換えが自由で便利なパソコンの高機能ワープロで原稿を書くのが当たり前になった今の時代から考えると、論文も手書きで原稿を書いていた時代があったことが信じられない気がする。研究書も、図書館に行ってカードを繰らなくてもインターネットの蔵書検索で簡単に探し当てることができるし、洋書屋に注文してから何カ月も待って手に入れていた書籍も安価なレートで数日で届くようになった。あの重い *O. E. D.* もいつからか自宅には置いていない。このように技術が進歩して研究の効率が革命的に進化したことを思うと、玉井先生の笑顔はそのままでも、やはり月日は流れているのだなと気づかされる。

院生時代のもう一つの印象深い思い出は、各自が書評や研究発表をする「談話会」である。発表内容についての先輩たちの質問や批評には容赦がなく、打ちのめされて落ち込むことが多々あり、本当に泣きだした院生もいた。あの場で鍛えられたおかげで、学会で発表した際にも、手厳しい質問にも動じることなく対処することができるのだと思う。ところが玉井先生は拙い発表のなかにも必ず何かしら良いところを見出して褒めてくれ、助言を与えてくれた。鋭い言葉で自分の発表が全面否定されると人格まで否定されたように感じてやりきれなくなるが、そんななかで玉井先生の温かい助言は一筋の希望を与えてくれる大きな救いであった。昨年、25 年ぶりに学会で私の研究発表を聞いてくださった先生は、「危なげなく安心して聞くことができた」

と言ってくださった。細々と研究を続けてきた私にとって何より嬉しい褒め言葉であった。

「院生時代は楽園だった」と就職した先輩から聞かされても、自分が当事者である時にはぴんとこなかったが、社会に出てみるとその言葉が真実であったことに気付かされる。学生という身分が保証されていて学割が使えるし、取得しなければならない単位数も学部時代に比べて少なく、基本的に業務がないので、自由に使える時間が豊富にあった。たまに夜中に目覚めることがあっても、次の日のことを思って再び眠らなければと焦ることもなく、これ幸いと目覚めたついでにそのまま朝まで本を読むことができた。恵まれて贅沢な日々であった。玉井先生が来られた頃まで遡って思い出をたどると、そんな気ままで幸せな時代が蘇ってくる。「楽園」は、離れてみて初めてその有難さがわかるものなのかもしれない。

たしか先生が阪大に赴任された年だと記憶しているが、日本英文学会の東京での大会の後、先生方と院生の全員が一緒に箱根に一泊旅行した。現地集合だったのだが、道中偶然にも玉井先生と同じ電車に乗り合わせた。初めて乗ったスウィッチバックの電車がジグザグに急斜面を登っていくのが珍しく、楽しかった。宴は夜中まで続き、寝不足と二日酔いの翌日はあいにくの大雨だったが、その時に撮った写真のなかでも玉井先生はにこやかに微笑んでおられる。傘を高く掲げた先生のジャケットの裾が風にあおられて尻尾を立てたようにピンと反り返っている姿がなんだかユーモラスで、そのままメリー・ポピンズのように舞いあがって飛んでいきそうに見える。

大変個人的なことであるが、玉井先生は、結婚披露宴のときに花嫁側を代表して私のためにスピーチをしてくださった。先生のスピーチは、常套句を並べた無難な内容ではなく、実際のエピソードを盛り込んだ心に響くものだった。先生の観察眼に恐れ入った瞬間でもあった。いろんなことに気づかぬふりをして、暖かく見守っていてくださったのだなとわかった。25年後の今、故藤井治彦先生をはじめ、そのときの出席者のなかの何人かはすでに鬼籍に

入っており、当日のビデオを見る勇気はとてもないが、玉井先生のスピーチは映像がなくとも鮮明に思い出すことができる。今更ながら、この場を借りてお礼を申し上げたく思う。

昨年、久しぶりに玉井先生と酒席をともにした折、ほろ酔いでご機嫌になられた先生と昔話で盛り上がった。こちらもアルコールのせいで気安くなって不覚にも愚痴をもらしてしまったのだが、先生は「これでいいのだ」と笑顔で繰り返された。「そんな、バカボンのパパみたいな……」と最初は思ったが、なんだか妙に納得してしまった。人間、半世紀も生きておれば悩みも積み重なり、後悔もある。何事にも100％上々ということはない。90％までうまくいったとしても、残り10％の不首尾が気になる。逆に、99％だめだとしても、残り1％に一縷の希望をつなぐこともできる。どう感じるかは、結局本人のとらえかた、考え方次第である。うまくいかなかった部分に焦点を合わせるから苦しくなる。「これでいいのだ」という言葉は、ものごとを前向きにとらえる視界を開いてくれる。現状を肯定して受け入れることが救いにつながる。25年の月日を経て、風格が加わっても柔和な先生の笑顔が変わらない秘密は、案外「これでいいのだ」という呪文にあるのかもしれない。ご退官後も、変わらぬ笑顔で元気にご活躍を続けられるようお祈り申し上げる。

（大阪大谷大学教授）

絶妙のバランス感覚

新　野　　緑

玉井暲先生が大阪大学文学部英文学講座の助教授として着任されたのは、私が修士二年の春でした。主任教授でいらした山川鴻三先生が御退官の後、

藤井治彦先生が主任教授としてお一人で英文学講座を主宰されていましたから、玉井先生のご着任によって、講座がやっと本来あるべき姿に整ったという充足感、あるいは安堵感のようなものが、研究室全体に漲ったように思われます。

ご着任の時、玉井先生は未だ三十代の半ば過ぎ。とにかくお若く、溌剌として、講座の雰囲気が一気に若やいだことを覚えています。相手の心の真ん中に鋭い言葉でズバリと切り込まれ、相対するのにある種の緊張を強いられる藤井先生の側に、細やかな心遣いを随所に示しながら、いつも玉井先生が穏やかに佇んでおられる。おそらくそれは、院生にとってはもちろんのこと、藤井先生にとっても大いに幸福な状況で、二十年以上経った今でもその頃の研究室の雰囲気は、講座の一つの理想の形として懐かしく思い出されます。当時、英文学講座と英語学講座は、研究指導の時間は別々ではありましたが、あらゆる点においてきわめて親密な関係を保っており、両講座の先生方や助手、そして院生が一体となって、やれ卓球大会だ、コンパだ、温泉旅行だと、様々な催しが行われていました。そうした和やかな楽しみの背後には、人の和を何よりも大切に思われる、玉井先生のひそやかな、しかし深いご配慮とご尽力があったことに今思い至ります。

玉井先生は、私が博士二年の夏に、一年間のご予定でオックスフォード大学に留学なさったのですが、翌年秋のご帰国はとても印象深く、私の心に刻まれています。といいますのも、玉井先生はあのご留学を境に、研究の上でも、また人間的な面でも大きく変わられたという思いが私の中にあったからです。それがどのような理由によるのか、一度お伺いしたいと思いながら果たせずにいて、それがまたその印象を深くしていることもあるようです。留学前の玉井先生のご講義は、18 世紀の風習喜劇や 19 世紀末の唯美主義芸術論など、基本的にはテキストに密着してその意味を探る、きわめてオーソドックスな形式のものでしたが、ご帰国後は新しい批評理論を次々と導入、紹介され、従来のテキスト観を転覆させるような見方やご意見をしばしば示され

るようにもなりました。そして、それと並行するように、あの穏やかな笑顔からは想像もつかない、人をドキリとさせるような断固たる価値観や辛辣な批評を時に口にされるようになったのでした。

もちろん、それは研究に関しても、また人格的な面でも、あまりにナイーヴな私たち学生のあり方にある種の危機感を持たれたからでもあるでしょうし、ご帰国の時には、すでに私は助手に採用されていましたから、学生であった時とは少し異なる大人としての対応という、多分に教育的配慮があったとも考えられます。しかし、ご留学を挟んでの玉井先生の変化には、そうした一般的な理由では説明しきれない何かがあるように思われて、そのことは今も私の心の片隅に解けない謎として留まり続けてもいます。

しかし、とにかく、私は玉井先生の授業によって当時流行の批評理論に目を開かれ、今まで思いもしなかったようなテキスト観やアプローチの方法を知ることになりましたし、さらには、助手の心得から就職後の着任校での身の処し方まで、本当に多くのことを教えていただきました。中でも強く心に刻まれているのは、就職が決まっていよいよ赴任という時に玉井先生から与えられた二つの注意です。一つは、「今は助手としてお茶汲みもしてもらっているが、着任後は女性だからといって、お茶を入れる必要はない」ということ。二つ目は、「着任先では自分の研究室にこもらずに、学科の共同研究室に時々顔を出して、同僚の先生方と話しをするように」ということでした。

一見些末なことのように見えますが、前者は、社会上の様々な慣習がある中で、いかに自立した研究者としてのプライドとアイデンティティを持って、身を処すかということ、また後者は、常に自分が社会の中の一員であるということを意識しながら、周囲の人々との連携を心がけることの必要性を、教えていただいたのだと思います。しかし、そうだとすれば、この二つの事項は、じつは互いに相反する性質、方向性を持っていることになり、その両方を同時に行うのは、とても難しい、じつに巧妙なバランス感覚が要求されることがらとも言えるでしょう。あれから二十年以上。多くの月日が巡った今

でも、私の中で両者の均衡がうまく取れている自信はありません。いずれか一方の方向に突っ走りかけている自分を発見して、思わずはっとすることもしばしばです。しかし、玉井先生から教えていただいたそのバランス感覚が、一研究者として、また一人の人間として、今なお私の重要な課題となっていることは確かのように思われます。

就職してからしばらくは、学会で年に何度かお目にかかってご挨拶をする以外、じっくりとお話をうかがう機会もあまりなかったのですが、ここ数年は、色々な偶然から、先生とご一緒に仕事をさせていただき、親しくお話をうかがう機会が増えてきています。その中で驚き、また感心するのは、研究や教育は当然のことながら、講座の運営から大小様々な学会の運営と事務、そして数多くの記念論文集の刊行や、たくさんのご友人や教え子たちの出版記念会の企画まで、とにかくありとあらゆる形の雑務を、玉井先生がすべて引き受けて、ほとんどお一人でこなしていらっしゃることです。それは、玉井先生の有能さを示すとともに、おそらく学会を維持して後進の研究者を育てて行かねばならないという、先生の強い責任感に押されてのことでもあるでしょう。そして何より、そのことは、先生が接していらっしゃる周囲のあらゆる人を尊重し、大切に思うお気持ちの表れでもあると思われます。

「しかし…」と、そのあまりのご多忙ぶりを目の当たりにして、時に思わずにはいられません。かつて「助手の鑑」と謳われた先生から見れば、おそらく周囲の至らなさにハラハラして、つい手助けをしてしまわれるのではないでしょか。そしてそれは玉井先生の本質的な「やさしさ」の表れなのだと思います。しかし、一方では失敗して恥をかくこともまた、大切な経験のようにも思われるのです。じっさい、これまでの二十年余を振り返って、私が先生に唯一つ望むことがあるとすれば、一度面と向かって叱られてみたかったということかも知れません。もちろん、これは、先生のそうした「やさしさ」に甘えながら、なんとか仕事をこなしてきた私の身勝手ではあります。しかし、ご定年後は、少しはその絶妙のバランス感覚を緩めて、時には大い

に「利己的に」自由な時間を楽しんでいただきたいと思います。その先生のご変身ぶりが、今から楽しみです。

（神戸市外国語大学教授）

東からの光景

佐野隆弥

玉井暲先生が、2010年の3月をもって大阪大学をご退職になる、とのことで、このたび*OLR*に一文を書かせていただく光栄に恵まれました。ご配慮をいただいた玉井先生並びに*OLR* 48号の編集委員会のみなさまに心より御礼申し上げます。

玉井先生が和歌山大学より大阪大学の文学部にお戻りになった1983年は、思い返すと、奇しくもぼくが文学研究科の前期課程英文学専攻に入学した年でもありました。その年度、英文学専攻に入学した院生はたまたまぼく一人でしたので、玉井先生の大阪大学時代の最初の教え子となるかと思います。それはさておき、当時の英文学・英語学専攻は、現在のような大所帯ではなく、英文学専攻には藤井治彦先生、英語学専攻には成田義光先生と河上誓作先生が教鞭をとっておられました。イギリス文学の院生もアメリカ文学の院生も同じ英文学の研究室に籍を置いていて、上下の風通しがよいだけでなく、隣の英語学研究室との関係も親密な、そんなアットホームな専攻であったと記憶しています。

玉井先生は、この研究室に30代後半の気鋭の研究者として着任された訳ですが、そのご研究が優れていたことは言うまでもないことですが、お人柄が高い評価をお受けになったことも大いに与っていたことを信じて疑いませ

ん。着任当初の玉井先生は、ご専門を授業に活かす形で、大学院ではゴールドスミスやシェリダンなどの18世紀演劇を、また学部ではオスカー・ワイルドを講じておられましたが、新天地での新鮮な情熱に溢れたご講義に連なったことは、とてもなつかしい思い出です。また、この時期の玉井先生のご研究の一環として想起されるのは、1985年からのイギリス留学ではないでしょうか。時折いただくお手紙には、きびしくも楽しげな研究のご様子が認められており、留学先からお送り下さった一葉の版画は、個人的なことで恐縮ですが、ぼくにとり院生時代を思い起こさせる貴重なアイテムとして大切にさせていただいています。

ぼくは結局4年間阪大の大学院でお世話になった後、九州にある福岡教育大に幸運にも赴任することになりました。九州は、確かに関西から見た場合、遠隔の土地ではありますが、しかし同時に、この当時もまた現在でも、阪大の卒業生が福岡地区の主要な大学で活躍してきた歴史があり、その意味で阪大との交流の盛んな、いわば阪大文化圏の中に含まれる地域であるとの印象を持っています。そのような環境の中、大学院を出た後でも、母校との繋がりの中で生活をしていたような感触がありました。その後阪大の先生方・先輩方のご助力等もあって、神戸市内の公立大学に移籍することになり、阪大の言語文化部にも数年間非常勤として出講させていただく機会をいただきました。たまたまぼくが阪大に出向く曜日と、玉井先生が文学部に来られる曜日が違っていたために、阪大英文学会などを除けば、この時期にはあまりお目にかかることはできませんでしたが、それでも時折文学部にお邪魔して藤井先生とお話できたことは、楽しくそして貴重な思い出となっています。

その後さらにぼくは、学部時代の恩師のお誘いもあって、筑波大学に移ることになりました。さすがに関東を含む東日本には阪大の卒業生は少なく、おそらくぼくは最も東で研究をしている阪大OBの一人ではないかと思います。しかし阪大文化圏の圏外に出たことが、逆に母校の研究室への関心を高めてくれたようにも感じています。ぼくが筑波大学へ転出した1999年は、

その前年暮れに藤井先生がお亡くなりになり、玉井先生が教授に昇格された年でもあったように記憶しています。藤井先生が若くしてご逝去されたことは今でも大変残念に思うことですが、そのご遺志をも受け継いで研究室の運営に当たられることになった玉井先生のご活躍ぶりを、僭越ながらぼくは遠く離れた関東から注目させていただいたのでした。

そのぼくの目に映ったものは、ご自身の研究はもちろん大切にされながらも、文学研究の困難な時代にあって、その歴史と伝統を維持しながら新たな学問の展望を開拓しようとされる、玉井先生の教育面へのご配慮でありました。実践面では積極的に批評理論や思想を文学研究に導入され、文学文化研究と大学教育の境界面を探求される一方、組織運営では、難しい過渡期の日本英文学会を理事として支えられ、新たに構築された関西支部の長として采配をふるわれるなど、英語・英米文学の活性化に向けて、情熱的にまた多面的に活動される先生のお姿は、日本の英米文学のもう一つの極である東京圏から見ても、非常に建設的であり、また勇気づけられるものであったと思います。阪大の研究室は、現在最も活気のある英米文学の組織の一つである、と言っても決して過言ではないとぼくは考えていますが、これも玉井先生のご尽力のたまものであると確信しています。

振り返ってみますと、筑波大学への転出は、個人的キャリア形成の面からは大変有り難いことでしたが、さすがに物理的空間の壁は大きく、阪大への足は自然と遠のき、玉井先生が活字にされたり、英文学会のニューズレターにお書きになったものを拝読する機会を除けば、お目にかかることもほとんどないままに季節を重ねたのでした。しかし、ちょうど2年前の2007年暮れ、研究科の助成を得て玉井先生を大学院の集中講義にお招きできたことは、望外の喜びでした。受講生の一人としてぼくも2日間のご講義を拝聴させていただきましたが、これは、時空間の断層を一気に越えて再び阪大の院生に戻るという非常に不思議な体験でした。玉井先生にはご迷惑なお仕事であったかも知れませんが、ご退官前に先生を自分の勤務校にお呼びし、滞在のお

世話をさせていただくことを通して、積年のご恩にわずかばかりとはいえお返しをしたいという、個人的な想いが叶えられた、何ものにも代え難い機会となりました。

ぼくが阪大の研究室でお教えを受けた先生方も、玉井先生で最後のお一方となりましたが、恩師がお辞めになることは、自分のリタイアよりもさびしい思いを強く感じます。玉井先生がこれからも精力的にご活躍なさることは当然のこととして、お体だけはご自愛下さるよう何にもましてお願いさせていただきたい。そして、後に続くわれわれにいつまでも元気と希望の灯を与えてくださいますように。ありがとうございました。

（筑波大学教授）

刻印された記憶の幾つか

伊　勢　芳　夫

玉井先生と初めてお会いしてから今年で24年目であるので、私は、先生が阪大に着任されて3年目の指導院生であったということになる。文学研究科に在籍した5年間は、毎年先生の授業を受講し、兵庫県の私立大学に就職した後も、学会や酒の席で年に何回かお会いしていた。それから言語文化部（研究科）で勤めることになってからは、阪大の仕事でご一緒をさせていただいたこともあり、先生への思い出は尽きないのであるが、すべてを同じように覚えているというわけではない。鮮明に思い出すものもあれば、ぼんやりとしか覚えていないことや、まったく思いだせないものもある。それでこのエッセイでは、鮮明に覚えているシーンを二つ、それから現在進行形で、間違いなく記憶に刻印されることを書こうと思う。それらの3枚の記憶のスナップショットが、玉井先生の人となりを幾らかでも伝えられれば良いので

あるが。

まず一つ目は、初めてお会いした時のこと —— 実は2回目なのであるが —— を非常にはっきりと覚えている。それは、文学研究科の入試の結果を見に行くために阪大坂を上っている時であった。私の名前を呼ぶ声がして、びっくりして振り返ると、親しげに微笑を浮かべたお顔が目に入った。しかしながら、一瞬その人が誰なのか思い出せなかった。それから並んで歩きながら、院入試の面接官のお一人であると気づき、はっとしたのである。面接のときは、緊張していたのと、故藤井先生の存在感に圧倒されて、実のところ玉井先生の印象はほとんど頭に残っていなかったのだ。だから、阪大坂で偶然お会いした時の印象が、実質上の先生の第一印象であった。それは実に好印象であった。二人で坂を上がりながら雑談をするうちに、私の心もすっかりくつろいでいるのを感じた。合否の話は一切していなかった。そしてあっという間に文学研究科の建物まで来ると、結果は知っていますが、ご自分で確かめられた方がいいでしょうというようなことを最後に言われて、先生は研究室のほうに歩いて行かれた。これだけのことなのだが、24年たってもこの第一印象が色あせないのは、先生のお人柄によるのだろう。

二つ目は、就職の話があったときである。その日は何かの酒宴があったと思うのだけど、はっきりとは覚えていない。思い出すのは、藤井先生から話があるといわれて、喫茶店のようなところに、藤井先生と玉井先生と私の3人で行くと、藤井先生から、兵庫県の女子大で教員を探しているが、君応募しないかという話であった。正直なところ、その時までそのような女子大がこの世に存在することすら知らなかった。ただ、私は就職先についてはほとんど関心がなかったのである。これには事情があって、私は子供のころから将来科学者になるという確信があったのだが、幾つかの事情でそれを二十歳ぐらいの時に断念せざるを得なくなって、しばらくかなり落ち込んだのだが、ある時から好きな小説を読んで暮らそうと心に決め、そのため英文学に方向転換したのである。だから一流の英文学科で勤めようとか、英文学会で活躍

しようとかいう気は全くなかった。だから藤井先生には、その場で応募する旨の返事をしたのだった。（実際に就職すると、のんきに小説を読めるようなところでないのがわかったのは、後日談である。）その時も、玉井先生との思い出は、藤井先生が帰られた後、玉井先生と二人でお話したことである。玉井先生はいろいろ気を使って私にお話されたり、助言をしていただいたのであるが、一番印象に残っているのは、いずれ人はその実力通りのところで働くことになりますというお言葉であった。先にも書いたとおり、私には英語・英文学の世界で野心というものは全く持っていなかったが、その言葉を聞いたとき、なぜか非常に励まされるものがあった。

最後は、現在進行形の話である。ここ2、3年、玉井先生にお会いするごとに、先生から、「伊勢君、博士論文を書きませんか」とか、「博士論文は、進んでいますか」というような言葉を、ごくさり気なく言われるのであるが、ここ何年か大学の仕事――研究ではない――を抱え込んでいて、夏休み期間も本が充分読めないほどの忙しさであったので、「なかなか雑用がいっぱいあって、できませんね」と苦笑しながら答えていたのであった。せっかく言っていただいて申し訳ないと思いながらも、博論を書き始める気力がわかずに、時間だけが過ぎていった。もっとも、車を運転しながらとか、夜晩酌をしながら博論の構想を頭の中で練ってはいたのである。ただそういうときの構想とは遠大なもので、2、3年図書館にこもらないと完成できないようなものであったが。

それと、滑稽な話であるが、私は不可抗力で博士を詐称していることになっている。実は数年前に文科省の在外研究員として、ロンドンにある大学で10ヵ月間研究を行った。その際に、イギリスの銀行で口座を開く手続きをしたのだが、郵送されてきた宛名や、ディビッドカードというか、銀行カードには、「Dr Y. ISE」と書かれていた。銀行で口座を開くのに履歴書を提出したわけではなく、したがって学歴詐称をしたわけではないが、職業を大学教員と書いたために、銀行員は当然私が博士号を持っているものと思ったの

であろう。イギリスの場合（というか、日本の方が特殊なのであろうが)、博士号をとるより教授になる方がはるかに難しいのである。まあそんなことで、私の財布に入っているイギリスの銀行カードを見るたびに、落ち着かない気分になる。

そんなこんなで、博士論文にまったく手がつけられないまま、玉井先生の退職まで1年を切ってしまった。そして夏休みになってすぐのころ、玉井先生から電話があり、今年の夏休みは忙しいですかと聞かれるので、抱えている仕事が数日前に一段落して、しばらくは時間がある状態ですとお答えすると、それから玉井節というか、あのソフトな口調で、褒められたり励まされたりで、私の方も心を動かされてしまった。まず博論の目次を先に作ってしまえば、それでほぼ完成するような気になって、「では、夏休みの間頑張ってみます」と返事をしてしまった。さあ、それからが大変である。確かにゼロから書き始めるのではなく、これまでの研究成果をまとめるということで、材料は十分にあるのだが、20ほどの論文を1つの論文にまとめ上げるというのは、それはそれで大変な作業が待っていた。2週間ばかり、文科省の科学研究費補助金を使って、ロンドンに調査に行くことになっていたのであるが、ロンドンでは、朝の9時半から、図書館が閉まる午後8時まで、ずっと博論だけにかかりっきりで、その後は、パブで好きなビールも飲まないで、宿でぼうぜんと缶ビールを飲んですぐ寝るという滞在であった。このエッセイの原稿も、10時間ぐらい博論のことをやった後で書いており、目はかすみ、頭は朦朧としている。

こんな大変な思いをしているのだが、玉井先生には非常に感謝をしている。これまでの研究成果をまとめるという作業をしていて、自分がどういう研究をしてきたのかということをはっきりと認識することができた。それに玉井先生も言ってらしたが、若いころの論文も捨てたものではなく、柔軟な考え方をしているなと、うれしくなったものである。

まだ博論は完成はしていないが、大体の目鼻はついた。将来博論のことを

考えるたびには、間違いなく、玉井先生のソフトな口調が思い出されることであろう。

（大阪大学教授）

意味の深さ

山津　さゆり

私は長編小説を読んだり、文学理論の本を読んだりすることがあまり得意ではないので、その方面で立派な業績をお挙げになり、文学理論を駆使して立派なご研究をなさっておられる玉井先生のようなお方を尊敬している。

私はシェイクスピア、ミルトンを研究してきたが、ミルトンの *Lycidas* についての論文を書いたとき、大きな転機が訪れたような気がする。私は *Lycidas* において固有名詞が特別な使い方をされていることに着目して、この論文を書いた。この論文を書くことによって、個々の詩を読み解くことの面白さを、私は感得したように思う。私はその時点からフロストの詩を研究することに向かって行った。文学理論に則った研究が出来るとよいのだろうが、私の興味は詩行の意味を正確に理解することにあった。

例をいくつか挙げてみたい。まず、フロストの "Mending Wall" (Edward Connery Lathem ed., *The Poetry of Robert Frost*, Jonathan Cape, 1967) の "he likes having thought of it so well / He says again, 'Good fences make good neighbors.'" という詩行の解釈の仕方である。特に問題なのは、"he likes having thought of it so well" の部分である。ここを「じっくりその意味を考えた満足感にひたりつつ」というように解釈された方がおられる。このような解釈では "so well" が "thought" にかかることになるが、それでよいだろうか。私は "so well" は "likes" にかかると考えた方がよいと思う。「それを思

いついたことがとても気に入って」と考えたいのである。ここの彼は、父親が言っていた "Good fences make good neighbors." という言葉の意味を深く考えようとせず、ただその言葉を思い出したことだけで満足しているのだと解釈すると、この詩の面白さが一段と増すように思われる。

次は、フロストの "Two Tramps in Mud Time" の中の詩行についてである。"Only where love and need are one, / And the work is play for mortal stakes, / Is the deed ever really done / For Heaven and the future's sakes." という詩行を、「愛と必要が一つになり、仕事が人間のための遊びであるところにのみ、神のために未来のために、真に果たされた行為がある。」と訳された方がおられる。「愛と必要が一つになり、仕事が命を賭けた遊びとなって初めて、行為が神と未来のために本当になされるのだ。」と訳すべきではなかろうか。"mortal" という語には色々な意味があるが、ここでは「命を賭けた」という意味に取るべきであろう。仕事は遊びでなければならない。しかし遊びといってもふざけたものではなく命がけのものでなくてはならないと、フロストは言っているのであろう。

次は、"Provide, Provide" という詩の中の詩行である。"The picture pride of Hollywood. / Too many fall from great and good / For you to doubt the likelihood." という詩行を、「ハリウッド映画の花形であった。偉人や善人から顛落して見る目を疑うほどの者があまりに多い。」と訳された方がおられる。「彼女はハリウッド映画の花形だった。偉人や善人だったのに転落する人があまりに多いのでその可能性は疑う余地がない。」とすべきではなかろうか。「可能性」というのはもちろん、転落する可能性のことである。

最後にフロストの有名な墓碑銘のことについてである。オーデンは彼の「フロスト論」の中で（*Selected Essays*, Faber and Faber, 1962, pp. 162-3)、フロストの墓碑銘を、ハーディとイェイツの墓碑銘と比較して面白いことを言っている。三人とも自分で墓碑銘を書いている。

ハーディの墓碑銘は、"I never cared for life, life cared for me. / And hence

I owe it some fidelity. . . ." というものである。オーデンはこれについて、「ハーディは自分の気持ちを述べているのではなく、悲観主義者の気持ちを代弁しているようだ」と言っている。イェイツの墓碑銘は、"Cast a cold eye / On life and death. / Horseman, pass by." というものである。オーデンはこれについて、「イェイツの "horseman" は舞台の小道具で、通り過ぎる人は "horseman" というよりは自動車を運転している人 であろう。」と言っている。ハーディとイェイツはどちらも気取りがあって、よい墓碑銘ではないと、オーデンは言っているようである。フロストの墓碑銘は、"The Lesson for Today" という詩の最終節に出て来る "I had a lover's quarrel with the world." というものである。三人の中でフロストのものが一番よいとオーデンは言っている。彼は、フロストは自分の本当の気持ちを述べているとして賞賛している。私も、フロストの墓碑銘が一番よいと思う。しかし、オーデンがフロストの墓碑銘として、"I would have written of me on my stone / I had a lover's quarrel with the world." という 2 行を引用しているのは適切ではないと思われる。

ところで、私はイェイツの詩をあまり読んではいないのだが、イェイツのこの墓碑銘については、たまたま井村君江氏の『ケルト妖精学』(筑摩書房、2003) を読んだことがあったので、オーデンの批評について考えねばならないことがあると感じた。イェイツのこの墓碑銘は "Under Ben Bulben" という詩の VI 部の最後の 3 行として記されているものである。井村氏は「この三行の詩句のうち、〝騎馬の男〟というのは、自分の墓のそばを通る見知らぬ人、馬に乗った旅人として、この詩句の意味を〝生を終えいま死にある自分の墓を冷たく見ながら通りすぎよ〟と呼びかけるのだとする解釈が一般的である」(p. 90) と述べた後、説得力のある証拠を挙げ、次のような意見を書かれている。「イエイツが最後に、〝騎馬の男よ、行け〟と呼びかけているのは自分自身に対してであるという解釈ができるように思う。いま地上の死というくびきを断って、次の生へと飛び立つのだ、地上より空へ向かって、

行け、そして暁の空駆けるあの騎馬の一群に加われ、そして共に永遠の妖精の騎馬行を行うのだ、と自らに言い聞かせているととれるのである。」(p.94)
私は井村氏のこの解釈はすぐれたものだと思う。オーデンはすぐれた詩人であり、批評家であるが、このイェイツの墓碑銘についての批評は、フロストを賞賛しようとするあまり、軽率になってしまったという印象を与える。

私はまだまだ勉強不足で、先人の研究者の方々、立派な業績を挙げておられる方々の胸をお借りしながら勉強している途上にある。これからもじっくりと勉強し、詩行の解釈がより正確になるようにしたい。そしてやがては文学理論もうまく使って、よりよい詩人論が書けるようになれるとよいと思っている。

(和歌山大学准教授)

玉井暲先生ご退職に際して

村　井　美代子

玉井暲先生に初めてお目にかかったのは、1988年の大学院入試の時だった。入学許可をいただいた4月からの講義では、300ページほどのラスキンの評論集がテキストに使われた。その薄緑色のテキストと講義ノート、講義資料を久しぶりに広げてみた。院生のころの自分の、現在とは別人のものとしか思えない几帳面な文字で、資料には1枚1枚丁寧に日付が書き込まれ、1から25まで番号が記入してある。ラスキンやアーノルド、ペイターはもちろん、20世紀の批評家たちの様々な評論、さらにワーズワスやシェイクスピアやダンテの作品が美しくレイアウトされ、先生の手で丁寧に出典が記入され、4月から翌1月までの毎講義時に資料として配布された。

院生にはやや高価なハードカバーのラスキンの評論集を読むことに最初少

し戸惑った。が、玉井先生はテキストを踏まえつつ、時としてそこから大きく逸脱し、様々な評論を紹介し、様々な英文学作品を丁寧に読み直された。ラスキンを1つの切り口にしながら、ご自身の専門分野の枠をこちらに意識させることなく、むしろその枠を軽く越えて、すでになじみのある詩人や作家の作品に多様な角度からアプローチされた。ノートや資料を見る限り、十分に準備を整えられての講義であったことは明らかだが、講義時の先生の語り口はそうした見えない部分での準備の周到さを一切うかがわせず、あるテーマから別のテーマへと軽妙に我々院生を導かれた。

このことを強く認識するようになったのは、自分自身が教える立場になってから、とりわけ本務校を得てからのように思う。専任教員になることを望んではいたものの、入試の作問作業や種々の委員会や会議、非常勤のころには知らなかった様々な同僚との付き合いなどに追われ、思うように準備を整えられないまま授業に臨むことが増え、研究者としても教育者としても苛立ちや焦りを感じるようになった。数年前、ひっきりなしに学生が訪れてくる玉井先生の研究室を所用があってお訪ねしたとき、先生の例の講義資料と、自身のこうした心境を少しお話してしまった。教員とは、引き出しを絶えず増やす一方、学生にその中身を絶えず提供してしまうことが務めの一種のサービス業だと考えたらどうですか、と先生はいつもの穏やでユーモラスな、だがどこかシニカルな口調で言われた。お目にかかる機会は少なくなったが、お忙しい中いつお会いしても、いつお電話をしても、玉井先生の口調や表情は本当に変らない。せっかちで前のめりになりがちなこちらの姿勢を、ユーモアを交えながら何度も慰めていただいた。ご退職される年度は以前からお聞きしていたものの、玉井先生が実際にもうあの研究室におられなくなることを思うと本当に寂しい。

当時も今も、他大学から阪大の大学院への入学者は多く、そうした院生がごく自然に先生方と親しく接している姿をずっと羨ましく思ってきた。人見知りしがちな性格もあるが、院生として様々な研究指導を受けながらも、学

部生として指導を受けてこなかった自身の阪大での根の浅さをずっと感じて来たように思う。甘えてはいけない、という妙に頑な気持は、藤井治彦先生がご病気になられ、1998年に亡くなられてから一層強くなった。就職先も決まらぬまま、大学院を退学し、その2年後に一応本務校はできたが、3年ごとに契約を更新する特任という身分だった。

退学後も玉井先生は何かあるたびにお声を掛けてくださり、お目にかかれる機会もいただいた。が、不安定な身分の現状を素直に訴えることができなかった。勤務先での新たな契約更新予定のなくなった最終年度に見つけた教員公募には、推薦状が必要だった。証明書の申請と受領に二度阪大へ来たが、大昔の院生の推薦状を玉井先生にお願いする勇気が出なかった。結局推薦状なしで応募し、幸いにも現在の職場に採用された。

ようやく親孝行できた気持ちになって、2003年の春に久しぶりに玉井先生の研究室をお訪ねし、就職報告をした。大喜びしてくださるものと思っていたが、「手のかからない子は親には楽かもしれんが、みずくさい」と生真面目な顔で言われ、涙が出そうになった。玉井先生に初めてお目にかかった大学院入学時から20年余りが過ぎた。妙に頑にならず、この間もっともっとご相談し、甘えておけばよかったと、先生がご退職される今になって痛感している。今後「手のかかる卒業生」に豹変してみたらどう言われるだろうか。いつもの穏やかな口調で、ユーモアたっぷりに、でもややシニカルに、「困りますねえ」と言われるかもしれない。

（三重短期大学准教授）

玉井先生の思い出

平　井　智　子

玉井先生が2009年度末にご退職、そして、ご退職記念号の*OLR*に掲載される原稿を自分が今書いているということが不思議な気持ちがしてなりません。私にとっての阪大英文学研究室は玉井先生とは切り離せない場所なので、先生がいらっしゃらない研究室を思い描くことは難しい、というよりも不可能に近いものです。そして、玉井先生は非常に若々しい存在として研究室にいらっしゃるのです。それも、私が先生のご退職を信じることができない大きな理由となっています。

私は、1987年に阪大文学部に入学、2年間の教養課程を経て、89年に3回生となり文学科英文学専攻に進学しました。玉井先生にはじめてお目にかかったのは、英文学専攻の選抜試験のときです。その年度は、英文学・英語学専攻定員30名にたいして31名の進学希望者があり、試験により選抜されることになったのですが、結局、試験会場に遅刻してきた学生がその場で受験を放棄し、実際に試験は実施されませんでした。その遅刻者を待っているあいだ、始まるはずだった試験に緊張しながら、私は英文学・英語学研究室の先生方のご様子をうかがっていました。そのときは大学院への進学についてはほとんど考えていなかったはずですが、そこには私が阪大を去るまでお世話になることになった英文学研究室の三人の先生、藤井治彦先生、石田久先生、そして玉井先生がいらっしゃいました。どの先生からも溌剌としたエネルギーが感じられたのですが、その中でも玉井先生の若々しい印象は、今もって私が英文学研究室と玉井先生を思い浮かべる際にも続いているのです。

玉井先生の学部の講義では、ウォルター・ペイターやヴァージニア・ウル

フを読みました。午後遅い時間に講義があった記憶があります。秋も深くなると豊中キャンパスは見事な紅葉に彩られるのですが、ペイターの講義のときに「ジーニアス・ローサイ」とおっしゃる先生の声が、秋の夕方の待兼山の風景と重なって思い出されます。「地霊と会話する」というのは、とても強烈な感覚でした。英文学にもそのような、なにか透明で神秘的な感覚があるのだ、と噛みしめるように思った記憶があります。また、先生は授業で使われる自作のハンドアウトをかなりの分量用意されるのですが、提出する課題の参考となるハンドアウトもたくさんいただきました。作品を読むのにさえ精一杯でまだ自分では適当な文献を探し出せない学部生にとって、多様な視点からのいくつかの批評をもとに作品を検証するとはどういうものであるか、玉井先生の授業で初めて体験することになりました。

1991年に博士課程前期に進学し、いよいよ近くから玉井先生のご指導をいただくようになりました。大学院1年目は、本当にしんどい年でした。当時のM1は英文学研究室の三人の先生が担当されていた、「院演」と呼ばれる演習科目を三科目とも履修しなければならないとされていたのですが、大学院の科目は学部のものとは格段に違う難易度で、しかも同級生のなかった私にとって周囲はみんな先輩で、研究や学生生活について同じ境遇で相談しあう相手もなく、見よう見まねで息切れしながら講義をうける毎日でした。なかでも批評理論がテーマになっていた玉井先生の演習では、担当した学生が毎回一章分の要約を行うのですが、担当者になっていなくても意見を求められるので、批評理論にはまったく不慣れの一人だけ一年生にとって毎週が緊張の連続でした。しかし、振り返ってみれば、この批評理論の院演を三年間受講したことが、修士論文からはじまって今にいたるまで、後に論文を書く上でどれだけ役立ったかわかりません。玉井先生は学生に自由に発表や意見交換をさせ、要所でさらりとまとめられていました。玉井先生の批評理論の院演というと、緊張感と対照的な爽やかな様子が蘇ってきます。

1995年の阪神大震災で当時私が住んでいた建物が全壊したため、それ以前の資料など失ってしまったものが多いのですが、「平成5年度（1993）院演授業予定」という玉井先生が作成されたプリントが手元に残っています。この年は、*Theory into Practice* というテキストを使い、ニュークリティシズムから、読者論、ポスト構造主義、ジェンダー批評、新歴史主義の立場から書かれた作品論を読んだのですが、一年間でテキスト一冊すべてをこなす予定を立てられています。このプリントをはさんでいたテキストを見てみると、ほぼすべてのページに書き込みがあり、先生の計画通り演習は進んだようです。後期の最後の週には「総括」と書かれていますが、2限に行われていたこの演習のあと受講生全員が先生に昼ごはんをご馳走になったのも懐かしく思い出されます。1995年は私が阪大英文学研究室で過ごした最後の年度でした。4月から神戸の大学で非常勤講師として勤務することが決まっていたのですが、自分が受けた震災のショックで、毎週神戸に通う自信がなくなり、玉井先生に我儘な相談をしたことがあります。その時も先生は例のさらりとしたご様子で「大丈夫。前から決まっていたことだから、行かないとだめですよ。」とおっしゃいました。玉井先生らしい厳しく軽妙な調子の励ましでした。それから一年間震災後の神戸の町を通って郊外の大学に通いました。

翌年、地元である山口の短大に勤務することになり、大阪を離れたのですが、それ以降も玉井先生には何度も励ましをいただきました。慣れない環境についての愚痴を申しあげたこともあります。藤井先生が亡くなられ、石田先生が退職され、阪大を訪れても在学していたころの様子からの大きな変化を感じましたが、玉井先生がいらっしゃることで、英文学研究室は私の気持ちのよりどころであり続けました。同世代のアメリカ文学研究者には、「アメリカ文学専攻なのに、在学中もそうだけれど、就職してからもイギリス文学の先生にそれだけお世話になるのも珍しい」と言われます。2009年2月

には、訳者として参加させていただいた、玉井先生監訳の『評伝J・G・フレイザー — その生涯と業績』が出版されました。文化人類学のみならず古典文学にもかなりの言及があるこの評伝の翻訳は、やり甲斐のある一方、なかなか困難なもので、途中で躓いてしまいそうになったのですが、玉井先生のお電話やお手紙でときには厳しく催促していただき、なんとか作業を終えることができました。思えば、在学中から現在まで、「これは無理かも」と思ったことが、玉井先生に一見さらりと厳しく、しかし実は大変あたたかく励ましていただくことによって、いくつも実現してきたのです。

先生のご指導の結果を示していかなくてはならない世代なのですが、相変わらずお世話をおかけしている甘えた学生の拙い思い出の話となってしまいました。ご退職にあたって、いちばんお伝えしたいのは、感謝の言葉です。玉井先生、本当にありがとうございました。

（広島国際大学准教授）

不思議なご縁

西村美保

玉井先生はとても捉えどころのない方なので、存じ上げているようで、先生にまつわることなど何か書けるのだろうかと不安になってしまいます。それでも記憶をたどれば、先生の様々な表情やお姿が浮かんできますので、ここでは先生にまつわる断片的な思い出の幾つかを紹介させていただこうと思います。

玉井先生と最初にお会いしたのは、私が研究生になるのを希望して、その事で研究室を訪問した時です。私は学部は他大学の出身ですので、かなり緊

張していたと思いますが、お会いして、とても感じの良い先生だったので、緊張が和らいだのを覚えています。おそらく私は今、当時の先生と同じくらいの年齢ではないかと推測するのですが、そう考えると、いろいろな意味で感慨無量です。研究生時代も、院生になってからも、研究に息詰まって時々相談に伺うのは玉井先生のところでした。先生はゆったりとして、距離を置いたスタンスで、的確なアドバイスをしてくださり、私は何となく肩の荷が降りたような感じで気分が楽になったものです。学生に対してでも研究対象に対してでも、この「距離を置く」ということは、つまりは客観的に見るということでもあるのですが、何て重要なことなのだろうと今更ながら、最近になって痛感しています。

当時の私は研究対象や自分自身を客観的に眺めるという初歩的な能力が欠如していて、それが基でかなりの混沌状態に陥っていた気がします。私は今年、院生の頃にひと夏かけて編み上げたレース編みのボレロを思い切ってリフォームしました。それはモチーフを一つ一つ編みつないでいくものでしたが、本の指示通りに編んで、ようやく仕上がってみると、自分の体よりも大きめに出来上がってしまいました。1、2度袖を通したものの、何となく気に入らなくて、たんすに仕舞い込み長年眠っていました。それを1昨年思い切って体に合うようにミシンをかけ、サイズ変更したのですが、美しさが損なわれたようで気に入らず、また仕舞い込んでいました。それを今回は手間がかかるのを覚悟で、ほどいたり、カットしたり、もとのモチーフをまたつなぎ合わせたり、新たに少しモチーフを編んだりして、ようやく自分サイズに仕立てたのでした。そもそも、最初に編んだ際に、自分自身の体のサイズに合うよう、調整が出来ていれば、あるいは少なくとも途中で気づいて引き返すという決断をしていれば、このようなことにはならなかったのでしょうが、これこそが「客観的に眺める」能力の欠如だったと思われるのです。この厄介な作業をしながら、この14～5年で私がわずかながらでも成長したとすれば、それはリフォーム前と後のボレロが物語っていることかもしれな

いと感じました。

阪大で学んでいた時代を振り返って残念に感じるのは、私に力がないばかりに、玉井先生のアドバイスや授業中おっしゃったことの意味が漠然と分かった気がしてはいても、明確には理解できずにいたことです。論文を書くということについても、ある日、玉井先生は「デッサンをするようなもの」といった喩えをされ、なるほどと思いはしたものの、だからと言って具体的にどうすればよいのか分かりませんでした。今では論文を書きながら、何を前景に持ってきて、どこまでを背景にするか、といった構成についての熟考、あるいは具象と抽象の差異など、論文の執筆は絵画制作と非常に共通するところがあると感じています。

玉井先生は授業中もご自分の意見というよりは学生の発言を重視されていました。私が自分自身の授業を振り返って、時折反省するのは、教壇に立っていて、学生からの答えを待ちきれず、つい自分で言ってしまうことです。意見を導くということには忍耐が要ると思います。私の記憶の中では授業中の先生の様子や表情が鮮明に映像として記憶されていて、今でも思い浮かびます。特に主に学部生が出席していた小説の購読の授業で、イヴリン・ウォーの *Brideshead Revisited* を読む授業に出ていたことがありますが、最近になってまた読んでいると、その授業の映像が浮かんできます。相変わらず、難しい作品だなと感じますが、ここ数年集中的にヴィクトリア朝の階上と階下の生活文化を研究してきたので、当時よりも興味をそそられる箇所が多く、眠れない夜に手に取って読むうち、ますます目が冴えてきてしまったということもありました。

玉井先生とは専門分野の関係で、共通する学会に複数属しているため、就職してからも1年に1度はお会いしています。学会ではあまりゆっくりとはお話できませんが、私は親戚でも、一年に一度も会わない人がほとんどなので、先生とは不思議なご縁だなと思っています。集中講義で福岡に来られた

際に、先生を慕う他の女性研究者たちと一緒にお会いしたこともありました。先生は他大学の院出身の研究者にも同じように親切に気さくに接するので、私の知り合いの福岡の女性研究者の間でも、とても慕われています。

お酒の席でも、ユーモアを発揮され、愉快になられても、感じのいいままなので、女性としてはとても安心して一緒にお酒を飲める相手でもあるのです。先生の話される関西弁も、九州の人たちにとっては、より親しみを感じさせるものなのかもしれません。ある時、英文学会の九州支部大会でシンポジアムの司会をされた時、私は「玉井先生ったら、関西弁でしゃべってる！」とはたと気づきました。それは不思議な経験でした。他の学会でも、シンポジストとしての先生の発表などをお聴きしていたのに、こんな風に感じたのは初めてでした。阪大にいた時は、おそらくもっと強烈な関西弁を聞いていたために、私は先生は標準語に近い言葉を話されているように思っていたのです。その九州支部の学会が終ってから、先生を交え、他の研究者たちとお茶を飲みに行った時、先生も同じように感じておられたとわかりました。「司会をしながら、私、関西弁しゃべっとるわって思ったんです。」と笑っておっしゃって、その場が盛り上がりました。

とりとめもないことを書いてきましたが、これからもお体を大切にして、いつまでもしなやかでダンディーな先生でいただけたらと思います。

（福岡教育大学准教授）

大人として振る舞うということ／人と向き合うということ

小　畑　拓　也

玉井暲先生のご指導を賜った学生・院生時代を通して、自分なりに咀嚼し、理解できたと思えることをできる限り簡潔に箇条書きで連ねていくだけでも、あっけなく紙幅が尽きてしまいそうです。ということで、この場では、私が日々を過ごし、仕事をしていく上で指針とするいくつかの事柄を先生がお示しくださった時のことを、思い返しながら綴っていこうと思います。

私が文学部を卒業したのは1994年3月のこと。気がついたら、という表現が一番しっくりくるのですが、もう15年も過ぎてしまいました。三、四回生当時の私は、英文学専攻に所属していながら講義・演習の教室と春の新入生歓迎会を除けば英文の先生方にお目にかかることがほとんどないという、およそ真面目とは言い難い学部生生活を送っていました。単位も卒業論文も、冗談ではなくギリギリの状態で何とか卒業にこぎ着け、会場に着いたところで卒業認定は間違いでしたと告げられるのではないかとおっかなびっくりで迎えた卒業式も無事に終わり、学位記を手にしてようやく胸をなで下ろしたその日の夜。

堂島の全日空ホテルシェラトン（現在のANAクラウンプラザホテル）の宴会場で催された英文学専攻恒例の（といってもほとんどの卒業生にとっては最初で最後の）謝恩会がおひらきとなり、学生たちは三々五々家路につこうとしていました。御堂筋沿いを梅田駅方面に向かう途中、玉井先生がその場に残った学生たちに、時間がある人はこのあともう少しおつきあいを願いたい、とおっしゃいました。

先生が10人あまりの卒業生を連れて行ってくださった先は、阪急ターミナルビルの17階から煌びやかな夜景を臨むバーでした。ソファ席に通され

て腰を下ろしたものの、「大人の空間」に圧倒されて受け取ったメニューをただおろおろと眺めるばかりの私たちに、先生は、何でも好きなものを注文してください、謝恩会では教官の方がご馳走になったのだから、ここは任せてください、とおっしゃったのです。注文していた飲み物がそろい、改めて乾杯したあとは、卒業生の進路、お酒の飲み方、大人としての振る舞いや文学について、話は広がっていきました。会話が盛り上がるなか、早々と私は注文したマティーニを飲み干してしまいました。すると、私がテーブルに置いた空になったグラスをご覧になって玉井先生が、もう一杯どうですか、とおかわりを勧めてくださいました。思い返すと全く恥ずかしい話なのですが、そのとき私は厚かましくも二杯目のマティーニを注文してしまったのです。そうして、和やかな雰囲気のうちにその場はおひらきとなりました。

それから何度も、玉井先生と宴席でご一緒することがありますが、いつに変わらず周囲に対して気配りを忘れないそのお姿を拝見するたびに、職場で学生と向き合う際には大人として、年長者として、先生のように誠実でありたいという思いを新たにしております。いまだに結果が伴わない状態ですが。

さて、どうにか学部を卒業した私が博士前期課程（修士課程）に進んだ1994年は英文学専攻内にアメリカ文学研究分野が設けられた最初の年でした。この制度的な変更に伴い、英文学研究室内は藤井治彦先生と玉井先生が英文学のご担当、石田久先生がアメリカ文学のご担当と研究分野ごとに分けられることになりました。とはいえ、書類上の履修手続きを除けば、実質的には一つの研究分野としての活動が中心になっていました。特に、大学院演習と談話会は研究分野の別なく英米文学系の院生が集まり、切磋琢磨する場でした。

その年の院演では、藤井先生がMiltonの*Paradise Lost*を、石田先生がEmersonを取り上げて、精読の訓練を進めておいででした。一方、玉井先生の演習は批評理論を通じた文学へアプローチを体感する場となっていました。Patricia Waughの*Practicing Postmodernism/Reading Modernism*をテクストに、

参加している院生同士がなれ合うことなく、かなり踏み込んだ厳しい意見交換・討論を行っていたと記憶しているのは、当時の私の無知・ナイーブさのせいだけではないと思うのですが。その緊張感あふれる場において玉井先生は常に、院生同士の自発的な議論に過度に干渉することなく、具体的な方向付けと交通整理をしてくださいました。その授業運営の方法を見習って、担当の授業・演習に生かしていきたいと考えているのですが、これまでのところどうしても「木を見て森を見ず、森を見て木を見ず」になってしまい、全体のバランスをうまく取ることができないまま、受講者・履修者の学習意欲を高める結果につながらず、もどかしい日々を過ごしています。

最後に、私の人生の転機となった思い出についてお話ししようと思います。

おそらく、今でもそう大きく変わってはいないと思うのですが、文学部在籍者・出身者の中でも自意識過剰気味の者にありがちな癖の一つとして、自分自身の過去の逸脱行為や劣等生ぶりを露悪的に語ることがあげられます。このような韜晦癖は、文学・芸術分野という「非生産的」だと考えられがちな分野に傾倒していることへの少なからぬ後ろめたさと裏腹なプライドという「重荷」に耐えられるようにともがいているうちに、いつのまにか身につけていく処世術なのでしょう。文学部を選んだことへのコンプレックスを共有しない人にとっては「卑下慢」としか感じられないものなのでしょうが、そうした心情をお互いに吐露しあうことによって醸し出される微温的な連帯感が支えている一種独特の小さなコミュニティーを拠り所に、何とか日々をしのいでいく者は確かにいるのです。

学部生の頃の私がまさにそうでした。大学院への進学を決めたのも、そのコミュニティーにできるだけ長く居続けたいという、甘えに似た感情がきっかけだったのかもしれません。ところが、かつて同じ場を共有し、専攻は違えども同様に大学院に進学していた友人たちは、一年、二年と立つうちに、プライドを裏打ちする実力を身につけ、「外向き」に通用する実績を着実に積み上げていきました。ナイーブさを振り捨てられずにいた私は取り残され

たように感じ、焦りました。自分の身の処し方について考えがまとまらないまま、私は修士論文の提出日を迎えました。拙いながらもがむしゃらに取り組んだ修士論文は、私自身の混乱を映したものとなっていたのでしょう。口頭試問の場で「腰の据わらない論文だ」とのお叱りを受けて、私は後悔の念にとらわれるとともに、途方に暮れました。そんな時、私に声をかけてくださったのが玉井先生でした。論文の出来はよいとはいえないが、面白い部分がある、そこを中心にまとめ直して学会発表をするといい、君の論の方向性からして、いろんな人に聴いてもらった方がいいように思う、思い切って全国大会で発表した方がいいのではないか、とアドバイスをくださったのです。

1996年10月、北海道で開催された日本アメリカ文学会全国大会で、私は初めての学会発表に臨みました。その経験があって、つまりは玉井先生が修論口頭試問後に背中を押してくださったおかげで、私は今、教育・研究に携わる仕事を続けています。いまだに内向きになりがちな傾向を打ち消せずに悶々とすることもありますが、玉井先生がお示しくださったことを生かせるように、自らを律しつつ、これからも全力で仕事に取り組んでいきたいと思います。いつか、次の一歩を踏み出せずに迷っている人の背中を押してやれるように。

（尾道大学専任講師）

理由なき反抗

川島伸博

玉井先生が停年を迎えて退官されるという話を聞いたとき、まずはとても信じられないという気持ちになった。初めてお会いしたときから、年齢を感じさせない先生の若さは際立っていて、それが今もほとんど変わらず、むし

ろより精力的に活躍されているように思えるからである。いつお会いしても、先生から老いの香りが漂ってくることはない。僕らが学部生の頃、誰かが(戦略的三人称ではない)「玉井先生の部屋にはドリアン・グレイの肖像画が隠されているに違いない」と冗談をいっていたが、あれから十五年以上たった今、その冗談はもはや伝説の領域に到達しようとしている。気がつくと自分自身が不惑にならんとしている。あの若さの秘訣は是非ともつまびらかにしてほしい。

次に寂しい気持ちになった。これからは阪大文学部の建物に行っても、先生の研究室がなく、気軽にお話できなくなるのかと思うと、正直に言ってさみしい。運よく関西の大学に就職することができた僕は、卒業してからもしばしば先生の研究室を訪れ、いろいろなことでアドバイスをいただいた。研究に行き詰り、しょげていると、先生は決まって励ましてくれた。超多忙の身であるにもかかわらず、こちらがお願いすると、嫌な顔ひとつせず、紹介状を書いてくれた。学会の仕事でご一緒するときにも、常にやさしく接してくれ、そのたびに僕は元気になった。現在、僕がまがりなりにも研究者としての道を邁進できているのは、間違いなく、先生の暖かく辛抱強い指導があるからこそ。というわけで、今後も学会などでご一緒するときには、いつも「どうですか？」で始まって「きみねぇ〜」という言葉で佳境に突入していく、先生独特の温かみのある説教に襲われるべく、先生を襲うつもりにしている。

そして謝罪の念につつまれた。玉井先生の教え子の中から、先生の気にくわない奴ランキングを作ったとしたら、トップに躍り出ることは(でき)なくても、僕は結構な上位に名を連ねていた(る？)かもしれない、と不安になる。1998年に藤井先生が亡くなられたとき、博士後期課程に在籍していた僕は、玉井先生をトップとする研究室の新体制になかなか馴染めないでいた。僕が藤井先生と同じくミルトンを専門にしていたことが原因だったかもしれない。上述した玉井先生の見かけの若さもその一因だったのかもしれな

い。いずれにしても、今思うと、知らず知らずのうちに先生に対して反抗的な態度をとってしまっていた。要するに駄々っ子の八つ当たりだったのだ。今だからわかるが、当時、先生は二十一世紀を生き抜く新しい研究室のあり方を模索していたのだと思う。そんな大変なときに、自分に余裕がなかったという理由から反発し、率先して協力できなかった自分を深く後悔している。玉井先生が退官されるこの機会に、先生への謝罪の念と先生への感謝の念とを合わせて心から謝意を表したい。先生、駄々っ子ですみませんでした。そして、こんな僕にも辛抱強く接してくれてありがとうございました。

しかし、こういった不従順があった僕だからこそ、先生の大きさ、先生が阪大英文に寄与した貢献の大きさを本当の意味で理解できていると思っている。玉井先生の一番すごいところは、僕のような厄介な弟子でも見捨てることなく、辛抱強く指導してくれるところにある。だからこそ、現在の阪大英文研究室の繁栄がある。阪大を出て、自分自身教壇に立つようになってからはなおさらのこと、先生の大きさを実感している。そして先生の大きさと優しさにこたえるためにも、僕ら教え子は、精進していかなければならないと常日頃思っている。先生は阪大を退官されても、学会や英文学研究をリードされる方だ。関西の英文学研究をさらに発展させるべく、これからもご活躍し、僕らを導いてください。

（大阪学院大学准教授）

玉井先生と私 ― 論文と影響

金　田　仁　秀

論文で名前を知ったのち学会や研究会などでその人物に直接出会うというようなことは、この業界に身を置くものには珍しくないことであるが、私と

玉井先生の関係もこうした経緯を辿るものであった。学部時代、私は大阪大学ではなく神戸市外国語大学に通っていたのであるが、4年生の卒業論文執筆の過程で、玉井先生の論文を拝読したのだ。それは『イギリス文学評論Ⅰ』に納められた「『ドリアン・グレイの肖像』における図柄」であった。

当時はまだインターネットも発達しておらず、アマゾンで注文した洋書が数日で到着するなど考えられない時代であった。したがって、大阪の紀伊国屋や京都の丸善に足を運んだり、東京で古本屋巡りをしたこともあったが、学部生として知識も手段もない私が手に入れられる文献といえば、ほとんど大学の図書館所蔵のものに限られていた。今から思えば既に90年代に入っていたのであるから、ポスト構造主義批評やフェミニズム批評が文学研究を席巻していたはずであるが、私が手にすることができた内外のワイルド批評は、作品に現れる道徳や芸術の問題を伝記的側面から考察するという伝統的なものばかりであった。もちろん例外もあった。ワイルドに関してはゲイ批評も行われ出しており、例えばAlan Sinfieldの*The Wilde Century*も読むことができた。しかしながら、クイア批評や文化唯物論などを知らず、作品論が文学批評と思っていた私には、それが道標となることはなかった。

「芸術のための芸術」とデカダンス。その仮面の下にある「真の」道徳者。70〜80年代に出版されたものでも、『ドリアン・グレイの肖像』に関する論文はこれらを伝記的に考察するものがほとんどであった。そうした中、先に挙げた玉井先生の論文は、まったく異質なものであった。そこでは唯美主義や道徳の問題などは論じられず、ワイルドの手紙を引き出して問題を解決しようなどという姿勢は一切見られない。玉井先生は多様な解釈を生み出す『ドリアン・グレイの肖像』というテクストを前に、その根底にある物語構造をいとも鮮やかに解読して見せるのである。芸術や道徳の問題を論じるなど、ヒューマニズムに基づいた旧来の文学批評に過ぎない。それは道徳的批評を繰り返すだけだとでもいわんばかりに。そこではイーザーが言及され、批評理論を巧みに使いながらテクストを読み解く玉井先生らしい論が展開さ

れる。そうした理論もほとんど知らなかった私には、先生のようなアプローチを自分のものにすることもできず、結局は芸術や道徳の問題を伝記に即して解読するといった卒論を執筆してしまったのであるが、先生の論文を読んだ時は目から鱗が落ちたのを覚えている。テクストをテクストとして精読することを初めて学んだのがこの論文であったのだ。

この論文を読んでから数ヶ月後、私は玉井先生本人にお会いすることができた。というのも、当時の私の指導教官、故山田勝先生が、私が大学院進学の意志を伝えていたこともあってワイルド学会に行くことを薦めてくれ、そこで玉井先生を紹介してくださったからだ。その大会では、玉井先生による『真面目が肝心』についての特別講演も聴くことができた。正直なところ、当時の私には理解できない部分が多かったが、『ドリアン・グレイの肖像』論同様に、この劇の主題や背景を単純に追うのではなく、この劇をテクストとして捉え、解読、解体するものであったことを覚えている。

その後、幸運にも大阪大学の大学院に入学でき、玉井先生の下でワイルド研究を続けることになったが、特に先生による大学院の授業は刺激的で、今日の私を作り上げたといえる。『英語青年』2002 年 11 月号掲載の「批評理論の教え方 — 批評理論の多様性とコミットメントのはざまで —」において、玉井先生は教師の役割について次のように述べている。「それ[教師の役割]は、学生自らがコミットメントに向けて対象批評理論を探すための環境づくりを行うこと、あるいは、学生がチョイスを行なうに当たって、選択肢としていくつかの複数の批評理論を提示して見せるということとなろう」(478)。この論文では玉井先生が大学院で取り上げた批評理論のテクストが幾つか挙げられているが、それらの多くを私は読むことができた。そして、こうした環境を与えてもらうことによって、さまざまな理論を知り、自らの道を選び出すことができた。

私が修士論文や博士論文を執筆する際にも、先生の方針はこのようなものだった。すなわち、私とは異なった視点を持つ論文を紹介してくれたり、論

の不備を指摘してくれる一方で、私のコミットメントを尊重し、自由に書かせてもらえた。そしてこれは、私自身が現在大学で批評理論や文学研究を教える際の指針になっている。

ワイルドを中心に研究してきた私にとっては、玉井先生のワイルド論はいつも刺激的であった。例えば、「社交界の劇空間 — ワイルド喜劇論ノート」と題する『つまらない女』論は、しばしば行われるピューリタンやダンディの議論とは異なり、この劇の構造を解き明かす。「快楽のゆくえ — オスカー・ワイルド『真面目が肝心』」と題する論文では、このテクストを脱構築しながら、この劇が持つダイナミズムを暴き出す。一言でいうならば、テクスト性を常に念頭におき、批評理論を巧みに使いながら解読するという点で、玉井先生の論は巷に溢れる陳腐なワイルド批評とは一線を画すのである。このようなアプローチは私に強い影響を与えてきた。そしてそれは、「影響の不安」のような形となって、私を捉えてきたように思う。

「影響」の問題が単純でないことを論じるのに、ポスト構造主義の思想を持ち出すまでもないだろう。「影響」の揺れは、『ドリアン・グレイの肖像』におけるヘンリー卿とドリアンの物語にも見られる。玉井先生の私に対する「影響」も単純なものではない。しかしながら、私に対する玉井先生の「影響」が多大であるということは疑いようがない。そして、既に述べたように、それが今日の私を作り上げている。ありふれた言い方になってしまうが、この意味で、私は玉井先生の弟子であり続けるのだろう。そして、そのことを私は幸福に思っている。

（広島女学院大学准教授）

玉井先生のご指導についての思い出

片　山　美　穂

大阪大学文学部、そして同大学大学院文学研究科にて玉井先生からご指導を頂いたが、とりわけ大学院に進学してからのことを思い出してみると、授業では主に、批評理論に関する演習を受けさせて頂いた。また、研究に関しても、先生には修士論文をはじめ、論文を書こうとするときには多々ご指導頂いた。先生の研究室を伺い、ドアをノックすると、「はい」という声が聞こえて、「今少しお時間よろしいでしょうか」とお尋ねすると、先生は「どうぞ」とおっしゃって下さった。授業や会議などでお忙しいにもかかわらず、いつも穏やかに迎えて下さり、改めて先生の学生に対する接し方について、感謝の念が浮かんでくる。

これまでの大学院での勉学を思い起こしてみても、私の研究は、玉井先生のご指導なくては成り立ち得なかった。修士論文として、私はエミリ・ブロンテの『嵐が丘』を取り上げたのだが、その後博士後期課程に入ってから、どのように研究活動を進めていったらよいのか、考えあぐねていた時期があった。『嵐が丘』を読んで惹かれるものを感じたからこそ、修士論文で扱う作品として『嵐が丘』を選び、分析したものの、より大きな視野に立って研究活動というものを眺めたとき、いったいどのようにこれからその勉学を進めていけばよいのか、分からなくなってしまっていたのである。博士課程では、博士論文の作成が視野に入ってくることもあり、そのためには、より大きな展望からテーマを決めて、一つの作品ではなく、いくつかの作品に対して、そのテーマを軸に取り組むことが必要になる。しかしながら、修士論文をなんとか書き終えたものの、私は、今後ずっと取り組んでいけるような方向性を見出し得ていなかった。

その後、何度か先生の研究室を訪ねて、相談させて頂いたが、その中で先生がおっしゃったのは、ブロンテ姉妹などの作品に見られる感情の問題について取り組んでみてはどうですかということであった。私はその先生のお言葉を道しるべに、それから研究活動を行うようになった。そして、博士後期課程を修了した今、先生のそのご指導が正しかったことを実感している。私はそれからブロンテ姉妹の作品、たとえばシャーロット・ブロンテの『ヴィレット』にも取り組んだが、『ヴィレット』では女主人公ルーシー・スノウに秘められた情熱という問題が、主要なテーマの一つとなっている。そのとき、私は埋葬のイメージなど、ゴシック小説にとりわけ見られる文学的技法を考慮しつつ、小論を書いたのであるが、埋葬というイメージが、女主人公の感情の埋葬、すなわち、抑圧のメタファーとして機能しているのではないかと論じていったとき、拙い論文ながらも、書いていて、文学作品に取り組む楽しさを感じているような気がした。その後、ブロンテ姉妹の他の作品も扱うことになったが、感情という視点から読んでみると、それぞれの作品は、私にその作品のもつ声を聞かせようとしてくれた。そして、浅学ながらも、その声をなんとか聞こうとしながら、私は博士後期課程を過ごしたように思う。それは、私にとって、作品と正面から向き合う至福のときでもあった。そして、そのような勉学の道へと導いて下さったのは、玉井先生に他ならない。

先生の英文学に対する卓越したご見識については、私がここで述べるまでもないが、先生のご指導は的確なものであった。そして、そのような先生が、いつも穏やかに研究室で私たちを迎えて、迷ったときには明かりを照らして下さったことは、本当に有難いことだと思う。

いつの授業であったか、批評理論の授業の折に、先生が「一度生まれたものはなくならないんですよ」という旨のことをおっしゃっていたことを思い出す。私はその言葉に感銘を受けて、忘れないように、テキストにそっと書き添えた。そのとき、先生にそのご真意をお伺いすることは叶わなかったが、

私なりに考えたところは、次の通りである。ある出来事が起こったとき、それは、それが起こった者に深い影響を与え、その者の中に変化を起こす。そして、その変化を経た者は、その影響から生み出されているという点で、その出来事は、たとえ目には見えなくても、けっしてなくならないのである。玉井先生からのご指導は、私にとって、この出来事に他ならない。先生からご指導を頂いたことが、今の私の勉学の道を作ってくれている。そして、その道がこれからの研究の道へと続いていくことを思うならば、先生のご指導を受けたことは、私の中で、深遠に響きながら、けっしてなくならないのである。

（近畿大学非常勤講師）

玉井先生の「すごさ」について

小　川　公　代

玉井暲教授ではなく、「玉井先生」と親しみをこめて呼ばせていただきますが、玉井先生には、修士課程を始めた1996年からお世話になっております。まだまだ修行は足りませんが、私が社会人になって学生を指導するまでになれたのも恩師である玉井先生のおかげだと思っております。

玉井先生との大学院時代の思い出はたくさんあります。遠方で行われる学会に出席すれば、阪大の先生も院生もみんな一致団結し、盛り上がりました。研究発表という大仕事が終われば、みんなのびのびと心から楽しむことができました。玉井先生をはじめ、阪大の先生はそのような自由な気風をそっと作ってくださるような粋なところがあります。カラオケで玉井先生の美声を聞くこともありました。

仙台で日本英文学会が行われたときなどは、先生と大学院生6、7人くら

いで近くの秋保温泉に一泊旅行しました。ピンポンをしよう、ということになったのですが、玉井先生も積極的に参加してくださいました。浴衣姿でボールを必至でおっかけながら騒いでいたのが、とてもいい思い出となっています。

玉井先生は、9年前の私の結婚式にも遠いところ出席くださいました。結婚のお祝いにウェッジウッドのピーター・ラビットが描かれた食器セットをいただいたのですが、その時に先生が「これはね、ちょっとやそっとではなかなか壊れないんですよ。なかなか丈夫にできていましてね」と言っていました。食器は先生のおっしゃったように、驚くほど頑丈です。何度か誤ってぶつけることはあったのですが、ひびすら入りません。

朝食のときに使うこの食器を見ながら、先輩の川島さんが玉井先生のことについて言っていたことを時々思い出します。

「玉井先生のすごさはね、すぐにはわからないんだって。」

研究者として玉井先生を尊敬していた私は、それ以上すごいと思えることはないだろうと思っていました。しかし、最近ようやく川島さんが言っていた「すごさ」が少し分かるようになりました。

私は、玉井先生が選んでくださった食器の「頑丈さ」が象徴するような結婚生活を送れるように知らず知らずのうちに努力してきたような気がします。いただいた当初は、英文学の先生なのに、ピーター・ラビットのイギリス的な絵柄についてではなく、その「頑丈さ」を強調するなんてなぜだろう、と思っていました。人間の意識というのはおもしろいもので、その「頑丈な食器」を毎日使う度に、先生のさりげないチョイスや言葉について考えるようになりました。おかげで、盤石とまではいかないまでも、先生にいただいた食器のように、互いを大切にさえしていれば、ちょっとやそっとでは壊れない夫婦の信頼関係が築けたように思います。

玉井先生といえば、あのお優しい笑顔と穏やかな声のトーンですが、時には社会の現実について教えてくださいました。もちろん研究者として、教育

者としてしなければいけないことをたたき込んでくださったのも玉井先生ですが、私にとって宝物となっているのは先生が折に触れて示してくださった「人間として大切なこと」です。

博士論文がなかなか書き上げられなかったときも、就職がまだ私にとって現実感を帯びないような時も、直接「こうしなさい」というのではなく、社会にでることがどういうことかを逸話を通して示唆的に教えてくださったのでした。

「X君がね、今年就職したのだけれど、すっかり別人のように晴れやかな顔になってね。」と、先生が唐突にきりだしました。

「大学院で研究ばかりしていると、だんだん顔がくら〜くなるんですが、やっぱり社会にでて、教え始めると忙しくなりますからね。元気になるんですよ。」と、玉井先生がその卒業生のことについてうれしそうにお話になるのをみて、その時は「ああ、そういうものなんだなあ」となんとなくそういうイメージを持っただけでした。

人間生きているといろんな人がいろんなことを言うのを耳にしますが、ほんとうに心の奥深くに残る記憶というのは一握りばかりだと思います。玉井先生との対話が私の記憶の中で比重がかなり大きいのは、私がその時々に必要としていた言葉を、先生がいつも的確に見抜いていらっしゃったからだと思います。

未熟であった私は、玉井先生がお話になる学生の逸話をいつも他人ごとように聞いておりました。私に人間としての深みが足りなかったからだと思います。しかし、今振り返ってみると、先生の逸話やお言葉は私が人生のコマを前に進めるためのなくてはならない足がかりだったように思います。たとえば、先生のお話がなければ、私は心から就職したいという気持ちにはなれなかったかもしれません。

女性が責任の重い仕事に一生捧げるなんてことは、なかなか決断できることではないのですが、先生と話した後は、そんなにシリアスに考え込むこと

ではないんだ、と思えました。玉井先生が「仕事」は人を「元気にするもの」だと形容してくださったおかげで、背中の重い荷物が羽に変わったような気持ちがいたしました。実際、今仕事ができているおかげで忙しいですが、とても元気に過ごすことができています。

何か不安に思うことがあると、玉井先生にご相談したものです。「いや、できますよ」という玉井先生の心強いお言葉で、どれだけ励まされたかしれません。どのような厳しい局面でも、先生が確信を持って「できます」とおっしゃってくださると、なぜか前向きになれました。その先生がもう早くも退官されると聞いて、月日の流れに呆然としてしまいます。これからも、先生のお言葉を胸に刻み、教育活動、研究活動に邁進したいと思っています。玉井先生、これまで本当にお世話になりました。感謝の気持ちでいっぱいです。

（上智大学准教授）

玉井暲先生との思い出

小久保　潤　子

玉井先生に初めてお目にかかったのは、もうずいぶん前のこと。早春のある日、大学院の面接の場でだった（とても遠い昔のように感じます）。控室（英文の院生研究室）から面接の部屋に入っていく際は随分緊張していたのだが、迎え入れてくださった4人の先生方のにこやかな対応に、少し気持ちがほぐれたのを覚えている。とはいえ、あがっていることに変わりはなく、質問された内容など詳細については思い出せないが、やはり貫録があって印象的だったのは（故）藤井治彦先生で、そして、その横に控えめに座っていらっしゃったのが玉井先生だった。

大学院に入ってからは、授業はもちろん、それ以外の面でも、玉井先生に

たくさんのことを教わった。先生のご専門はイギリス文学とはいえ、これが阪大院の素晴らしいところと私個人は考えているのだが、文学・小説研究において、イギリス／アメリカを特に区別しないで指導してくださった。

とにかく周りが優秀かつ個性的な面々で、しばらくはついて行くだけで必死だった覚えがあるが、そんななかでも玉井先生には気安く接していただけて、とても気持ちが和み、ありがたかったことを鮮明に記憶している。

談話会の後、石橋駅前の喫茶店「花の館」（通称花館（はなかん））の2階に先生方と院生が集まってのお茶会。十数名いることもあったが、ちょうど玉井先生のお隣に座れた時には、「玉井節」（？）とも呼ぼうか、先生先生独特の「語り」を聞くことができてラッキーだった。

ナッツを注文してくださったことがあった。些細なエピソードなので、先生は覚えていらっしゃらないだろうが、私は皮をうまく取ることができず、手元から飛ばしてしまったのだが、そのナッツが先生の座っていらっしゃるテーブルの前に落ちた。「すみません！」と恐縮してしまった私に向かって、咎めることもなく、いたずらっぽい笑みを浮かべてそのナッツをつまんで召しあがったその表情も、私にとっては懐かしい。

ただ、なんといっても「玉井節」の真骨頂が発揮されるのは、お酒が入ったときだったりする。非常にお酒がお強い玉井先生は、飲み会の場でも、食べ物はそんなに召し上がらないで、手酌でおいしそうにお酒をたしなまれる。そんな時、先生が院生だった頃のお話や、先生の教え子のお話、オスカー・ワイルドなどなど、滑らかな語り口に院生一同、耳を傾けたものだった。院を出てから、なかなかそのような場に居合わせる機会がなく、ちょっと寂しい。

オフィス・アワーには、先生の研究室にはいつも学生が訪れていた。先生がいつも院生研究室に顔を出し、フレンドリーに接してくださるので、学生のほうもわきまえたもので、ついいろんな質問や相談を持ちかけてしまうのだろう。私もその一人だった。何とか先客がいない時を見計らって先生の研

究室のドアをノックすると、気軽に招き入れてくださった。研究のこと、将来の進路や不安について、授業でわからなかったこと。気づいたら一時間以上も話し込んだこともあった。研究のアドヴァイスでは、うず高く積まれた本の山の中から選別してお勧めの資料を取り出し、貸してくださった。よく覚えているのは、博士課程にあがって間もない頃、先輩と2人でお邪魔した折のことだ。紅茶を手ずからいれてくださり、話に花が咲いて、すっかりくつろいでしまった。

煮詰まったとき、どうしたらよいか分からなくなった時、悩んでいる時、相談を持ちかけると、お忙しい時でも一緒に考えてくれる方だった。普段はあれこれと口を挟むようなことはなさらないけれど、ここぞという時にピシッと的確な助言をなさるのが玉井流なのである。それは決して「命令」口調ではない、「〜することをお勧めします」というようなやんわりとした言い回しだったりするのだが、豊かな経験に裏付けられたお言葉には、十分な重みがあり、はっと気付かされることがたくさんあった。

玉井先生のご専門はイギリス文学で、私はアメリカ文学であるため、主に対象とする作家・作品は自ずと異なるが、基本となる「発想」は英・米文学変わるものではない。それを教えてくださったのも玉井先生だった。この基本となる「発想」は文学を研究していく上のみならず、生きていく上で世界と向き合う時に私の基本姿勢となっている。その発想とは、まず「ディコンストラクション」である。既成の枠組みに捉われず、物事を見たり考えたりすること。破壊するのではなく、内側から崩していくこと。そのような思考実践の狭間に変化の可能性があること。これらは現在の私の研究スタンスの核心とも言える。

そして「語りの理論」「ナラトロジー」。理論といっても、テクストあっての文学研究であるということ。文学理論の授業で、ジョナサン・カラーやヒリス・ミラー、ハロルド・ブルームなど英米文学プロパーの批評家だけでなく（それだけでも錚々たる面々であったが）、ミシェル・フーコー、ロラン・

バルトなど社会学や哲学関係の思想家たちに出会い、その文章に触れ、彼らの発想を吸収したり、批判的に分析したりする機会を得られた。といっても、難解なものも数多く、自分一人ではおそらくは挫折してしまったであろうと思われる文章も、院生同士、いろいろ意見を出し合う場があったので、何とか乗り切れたのだと思う。うまく解釈できなかったり、ピントが外れたコメントが出ることもあった。私自身も正直難しくて、担当箇所をよくわからないままままとめていたこともあった。皆の議論が思わぬ方向にそれていってしまうこともあった。そんな時でも玉井先生は、上手に軌道修正し、院生たちの言わんとするところをうまく掬いあげて、いつも一回の授業内でまとめてくださった。今、自分が教え、指導する立場になって、それが簡単そうに見えていかに難しいことか、実感する。自分の意見を言うのはたやすいが、他人の意見を聞き、その真意を汲み取ることが、どれだけ大切であり、困難なことか。この文章を書き綴りながら、それを苦労の形跡も見せずにスマートにこなされる玉井先生の「指導者」としてのすばらしさを再確認している。そして、そのような素晴らしい先生に指導していただけたことに、感謝の気持ちを新たにしている。

ありがとうございました。これからもどうぞお元気で、また語りを聞かせてください。

（愛知淑徳大学専任講師）

不思議な国の玉井先生と私

桐　山　恵　子

ウサギ穴に落ちた、アリスのような心境だった。一刻も早く脱出しなければ、とそればかり考えていた。ところがこの脱出計画は、不思議な国で玉井

暲先生に邂逅し、幸いにも頓挫するのだけれど。

1998年4月大阪大学大学院文学研究科博士前期課程1年生となった私は、入学早々に私とこの新しい世界は互いの凹凸の符号がまるで一致しないと思い込み、2年間の滞在期間が終われば即刻脱出と決意した。研究者になるべく学問に邁進すると決意した人たちの醸し出す、それ以外のことへの興味は、当座封印するのが望ましいといった、少し斜に構えたような価値観を、自分の心の中にストンと受け入れることができなかった。あり体にいえば、英語で書かれた物語が好きという単純な入学動機しか持ちあわせなかった私は、論文だの学会発表だのと将来の展望を熱く語る周りの人たちに、完全に気おくれしてしまったのである。

その思いは、玉井先生による大学院演習の授業で一層強まった。テキストは忘れもしないジョナサン・カラーの『文学理論』だ。そう分厚くないポケットサイズの一見おしゃれな本である。ところが、その内容は皆目意味不明だった。英語を日本語に逐一訳しても、その意味するところが分からなかった。今まで一度も耳にしたことがなく、その表記は漢字なのかカタカナなのか果たして表記可能なのかと考え込まなければならないような、シニフィアンとシニフィエがまったく結びつかない用語が空(くう)を飛び交っていた。演習が行われる教室は、まさにすべてが異化され、転倒され、支離滅裂となった、トランプの女王が支配するアリスの世界そのものだった。易しいことはあえてややこしく、難しいことはより複雑に述べたものに勝利が与えられると思われた世界は、易しいことは易しいまま、難しいことには、お手上げです、と自ら負けを告白するほかない私にとって、至急退場しなければ死刑宣告の可能性がある危険なゲームだった。

しかし、私は本物のアリスよりずいぶん幸運だった。私が参加したゲームの判定者は、横暴なトランプの女王ではなく温厚篤実な玉井先生だったからだ。玉井先生は「その意見はまちがっている」とか「その考え方はおかしい」とか、参加者のゲームへの意欲を根こそぎにするようなことは絶対におっしゃ

らなかった。今から思えば当時の私は、訳した文章を自分の思考の中で再度かみくだき理解しようとする努力、解釈するという行為を完全に欠いていた。理論で武装したハイレベルな議論が交わされる中、意見ともいえない、私のすっとんきょうな個人的感想はゲームのルールから大きくはずれていただろう。しかし玉井先生は、鋭い批評から愚にもつかない私見に至るまで、そこで交わされたあらゆる発言に対して公平な態度を示された。全肯定も全否定もされず、そこにはすべてを受け入れる広く厚い心があった。

批評行為で、まっすぐ延びたきれいな線をわざと斜めから眺め、これは直線ではないと解釈することは、すなわち自らの心もゆがんでいると公言するに等しく、断じてそのような仲間には加わらないと決めていた私にとって、玉井先生はとても不思議な存在だった。発言がひと段落した折や授業の最後に、先生は、そよ風が望まぬとも吹いてしまったというごく何気ない様子で、一言二言、これまでの発言を総括することをおっしゃった。それは舌鋒するどくなにかを攻撃する威圧的な態度とは程遠く、しかしそれでいて、いつもなにかしらあっと思える新鮮な発見があった。そして私はそのような発見を繰り返すうちに、これまでの自分の思い込みの誤りに気がついたのだ。直線を曲線と解釈することは、自らの心のゆがみではなく、その豊かさの証明であるということに。さらに気の進まないまま参加していたゲームの勝利は、目立って横暴な振る舞いをするトランプの女王に与えられるとは限らず、世界を一新させる一言を発した、至極控え目で思いやりに満ちた存在に与えられる可能性もあるのだということを。その頃から私は、この不思議な世界と私の凹凸の符号は、予想していたよりもそう不一致ではないかもしれないと思い始めたのである。

そのような私の心境の変化を知ってか知らぬか、たとえ知っていたとしても、それを表立って追及することのない玉井先生は、常に公明正大だった。研究に関して委細に口を出されることはなく、私はいつも拍子ぬけするほど自由だった。不思議な国の私はその自由を謳歌し、気の向くままに好きなド

アを開けお気に入りの道を歩いた。けれどその冒険途上で、玉井先生の姿が完全に消えて見えなくなることは一度もなかった。先生は居丈高になにかを強要したり、押しつけがましくなにかを与えたりすることなく、ただ私の自由気ままな旅を見守ってくださっていた。私がまちがったドアを開けたり、危ない道を選択したりしそうな時に、散歩の途中で偶然私に出くわしたという調子で登場し、さりげなくそれを指摘したかと思えば、またふっと森の中に消えていく、玉井先生はそんな洒落た雰囲気をもった心優しい紳士だった。

先生がそよ吹く木陰で述べられた、なかば本気なかば冗談という言葉で、あれは私の未来を決めた先生の予言だったにちがいないと思うものがある。「あなたとは長いつき合いになりそうだから」と一言おっしゃったのだ。未だ脱出計画をめぐらせていた私にとって、この言葉はその場で雲散霧消すると思われたと同時に、もしかしたらこの予言は現実のものとなり、私が冒険の道をずっと歩き続ける可能性もあるのかもしれないとふと思ったのだ。そして事実、私はこの幸福な言葉の意味するところのものに、自分でも驚くほど美しく、見事にからめとられてしまったのである。

今から約10年前に、飛び込んだというより、まさに落ちてしまったウサギの穴。目の前にゆくりなく出現した新世界のあまりの凸凹具合に、到底この凸凹は越えられないと思ったアリスならぬ私は、そこで他の誰でもない玉井先生と出会うことにより、不思議な国からの脱出を中止した。まっすぐに並んでいたトランプが一斉にひっくり返り、新たな形状を見せる不思議に次第に取りつかれていった私は、どこまでも続く冒険の道を自分の意思で切り開いていこうと計画を大きく変更したのだ。そして現在、和歌山大学に勤務する私は、玉井先生も立たれていたはずの教壇から不思議な国の彼方の地平線を眺め、これからどのドアを開け、どんな道を歩いて行こうかと新しい計画に胸を躍らせている。次の曲がり角で、散歩中の玉井先生がふらっと現れることを期待して。

（和歌山大学准教授）

私にとっての羅針盤

橘　　幸子

自他共に認めるほど年相応の落ち着きがない私にとって、玉井先生は、いつも大事な局面で背中を押したりフォローしてくれたりする存在でした。博士論文予備論文を提出した後、しばらく博士論文作成に取り組まないでいた私に、先生が発破をかけてくださったおかげで、早急に完成させなければならないという気力が湧き、その数ヵ月後には無事に博士論文を提出することができました。博士論文公開諮問後の打ち上げで、先生が、呼びかけにすぐに応えて私が論文を提出したことが涙が出るほど嬉しいと言ってくださったことは、二年経った今でも鮮明に覚えております。不可抗力により学位授与式で文学研究科総代となり、壇上で学位記を受け取った際の私の写真が大阪大学のホームページに載っていることをいち早く見つけてくださったのも、玉井先生でした。未だに携帯電話すら所持していないほど文明機器に疎い私が、その写真を後輩の関さんに印刷してもらい、実家に郵送したことにより、私が式服姿の記念写真を撮らなかったことに文句を言い続けていた両親と祖母の怒りもとけました。

博士課程一年の時には、実家でだらだらと春休みを満喫していた私のもとへご連絡をくださり、非常勤講師としての初めての仕事を紹介していただきました。幸いなことに非常勤先ではとても可愛がっていただき、途中で勝手な曜日、時間変更を申し出たにもかかわらず、現在まで仕事を続けることができております。博士課程を修了してからも、先生は常に私の就職のことを気にかけてくださいました。博士号を取得したことによる解放感に浸り、安穏と過ごしていた私に、先生は私が応募できそうな公募がある度にお電話で知らせてくださいました。少々時間はかかってしまいましたが、先生が退官

される年に合わせて自分が専任職を得ると報告できたこと、そしてその報告をとても喜んでいただけたこと、心より嬉しく思っています。就職活動で応募先の大学に主要業績として提出していた論文のうちの一つは、一度、学会誌に投稿して審査の結果落ちたものを、修正して他に応募するよう先生に励ましていただき、そのご指示通り加筆修正して別の学会誌に採用されたものです。本当に感謝しております。新天地での活動には不安もありますが、先生からいただいたアドバイスを基に頑張っていきます。

今回このエッセイを執筆させていただくにあたり、過去を振り返ってみたのですが、私が玉井先生と大学院入試の時に初めてお会いしてから十年以上もの歳月が流れていることに驚愕いたしました。大学院に入学した当初、学部時代は表層的にしか文学理論を学んでいなかった私にとって、玉井先生の演習で先生と先輩方が発せられる単語が時折宇宙語のように思え、授業中は物知り顔で頷きながら、後に必死で図書館などで勉強したことが懐かしく思い出されます。大学院に入学した当時よりは外面的には随分、内面的にも幾分、落ち着いてきたと自負していたのですが、後輩の森本君とセットで「芸人になればいい」という主旨のご意見を先生からいただいてしまうあたり、まだまだ修行が足りないようです。来春から関西を離れる私ですが、大阪に戻った際には、先生の行きつけのお店でお酒と美味しい料理をご一緒させていただき、おかみさんと「玉井先生がいかにダンディか」ということについて、また熱い議論を交わせたりできれば幸いです。

（神戸松蔭女子学院大学、大阪学院大学　非常勤講師）

信頼と尊敬を込めて

足　達　賀代子

ここに、玉井先生への感謝を言葉で語ることは、殆ど不可能な企てであると私には思われます。それは、文字数の制約のためだけではありません。たとえ、無制限の文字数を与えられても、先生への感謝の思いを十二分に伝えることは、多分できないでしょう。

しかし、古より人間は、絵や音楽、とりわけ言葉によって自然や神への感謝を表してきました。聖アウグスティヌスは、神への感謝の言葉に満ちた『告白』のなかで、告白者の言葉の真偽を知ることができるのは、ひとり神のみである、と述べています。言葉の意味伝達能力の危うさに鑑みれば、アウグスティヌスの告白が言葉によってなされていることは、彼の神への信仰——神が彼の告白の言葉が真実であると知り給うことへの信頼——を強く証するものだといえます。

言葉で感謝の思いを表すことは、読み手への信頼と尊敬を表すことと等しいのではないでしょうか。以下の拙い文章は、そのような思いに支えられています。

1999年は、私にとって人生の一大転機の年でした。それまでの職を辞して、阪大の文学研究科博士前期課程で学ぶことが許され、スペンサーをはじめとする英国ルネサンス文学の研究へと新たな一歩を踏み出した年、そして、何よりも、玉井先生に初めてお目にかかり、ご指導を仰ぐこととなった記念すべき年であります。

院試の面接で初めてお会いした折の玉井先生の印象は、今でも鮮明に記憶しています。端正なお顔、眼鏡の奥の明るい理知の眼差し、雅量の豊かさを

示すにこやかなお口もと、そして穏やかで温かなお話しのなさりよう――玉井先生が、純粋に学問を愛し、ご研究と教育とに全霊を傾けておられる真の学者であり、そして、この先、指導教官としても人生の師としてもご信頼し、ご尊敬申し上げることのできる方であることを、その時私は直感したのでした。この嬉しい直感は、程なく揺るがぬ確信となりました。爾来、私の院生としての歩みは、常に玉井先生という「導きの星」に照らされ、その守りと導きのなかにありました。

私の歩みは非常に遅く、また、しばしばあらぬ方向へと逸れようとしたのですが、先生のおかげで、研究を続けることに関して思い悩んだり、迷ったりしたことは唯の一度もありませんでした。先生は、家庭生活や人生の様々な重大事に手をとられ、また、何よりも生来の怠惰で遅鈍な性質のために遅々として進まぬ私の研究のありようを、そのまま丸ごと受け止めて下さり、いつも驚くべきベスト・タイミングで的確な助言を与えて下さいました。「1ミリずつでもいいから、日々、進んでいくことが大切ですよ。」、「日々の歩みは僅かでもいいから、それを形に残し、積み上げていきなさい。」といった先生のお言葉は、今も、そしてこれからもずっと、私を支え、導いて下さることでしょう。

研究のあり方についてご指導下さるとき、先生は、「2つのPを大切に」と繰り返しおっしゃっていました。「2つのP」とは、"Perspective" と "Particularity" を指します。研究する上で重要なのは、先行研究を徹底的に調べ、全体の流れの中での自分の立ち位置をしっかりと定めること、その上で、テキストの細部にも目を配り、独自の観点から論を展開すること、という意味だと私なりに理解しているつもりなのですが、まだまだ理解が不十分なのだと反省しています。

「2つのP」の教えを実践することは殊の外難しく、時にはルネサンス以来400年にわたる大河の如き先行研究の流れの中に埋没してしまったり、微細な点に拘泥するあまりに全体を俯瞰できなかったり、また、独自性に走り

すぎて、あらぬ方向へと暴走してしまったりしたのですが、自分では気が付かないことも多かったと思います。そのような時、いつも先生は、問題の所在を明確に見抜き、いとも優しいおっしゃり方で、私にも気付かせて下さいました。

また、研究が行き詰まると、行く手の覚束なさに足がすくみ、「もう一歩も進めない、ここは撤退して出直すしかない。」と、自己欺瞞にも似た諦めに取り付かれている時にも、先生は私を決して見捨てることなく、突破口を一緒に探して下さり、もう一歩踏み出す勇気と最後まで歩みきる粘り強さを教えて下さいました。

John D. Bernard は、ルネサンスの文学作品にしばしば現われる「師＝賢者」には、庵にこもって祈りと瞑想を行い、訪れる人に教えを与えるタイプと、庵を出て、人々とともに歩みながら導くタイプがある、と述べていますが（*Spenser Encyclopedia* 359)、『妖精の女王』にもその両タイプが登場します。第 1 巻 10 篇で赤十字の騎士に天の都を遙拝させる「観想」の老師や第 6 巻 5 篇で、口喧しい獣に咬まれたティミアスとセリーナを治療し、指導する隠者は、前者に分類されるでしょう。一方、改悛した赤十字の騎士に付添い、観想の山へと誘う「慈悲」の老女や第 2 巻の主人公ガイアンとともに歩む老巡礼は、後者の代表例といえます。研究の悩みを抱え、ご指導を仰ごうと研究室を訪ねる私達の相談にいつも親身にのって下さるだけでなく、一人一人の研究の道のりをともに歩んで下さり、なかなかご期待に添えなくても決して見捨てず、忍耐強く導いて下さる玉井先生は、これら 2 つのタイプを兼ね備えた理想の「師＝賢者」ではないでしょうか。

最後に、『妖精の女王』から次の一節を引用して、先生に捧げたいと思います。玉井先生、本当に、どうもありがとうございました。これからもずっと先生のご指導のもと、たゆまず、諦めずに、日々 1 ミリずつでも進んでいける自分でありたい、と切に願っています。これからもよろしくお願い申し上げます。

Still he [the Palmer] him guided ouer dale and hill,
And with his steedy staffe did point his way:
His race with reason, and with words his will,
From fowle intemperaunce he ofte did stay,
And suffred not in wrath his hasty steps to stray. (II. i. 34. 5-9)

（京都大学非常勤講師）

貴重な言葉たち

垣　口　由　香

院試を控えた年、私は進学先を決めかね複数の志望校の間で迷っていた。そんなとき、出身校である大阪女子大学の指導教官である正木建治先生から大阪大学への進学を勧められたのだが、その際、正木先生がおっしゃったのは「玉井先生という素晴らしい先生がおられるから、大阪大学を受けてみなさい」という言葉であった。（ちなみに、当時玉井先生は大阪女子大に非常勤として出講されており確かジェームズ・ジョイスの講義をされていたと記憶しているが、不埒な私はその授業を受講していなかった。特別な理由などなかったはずである。今にしてもったいないことをしたと後悔するも後の祭り。）そして、この一言で私は非常に安心し、大阪大学への受験および進学を決めた次第である。

このような経緯があったために、入学前にすでに未来の指導教官に対する勝手な想像は大きく膨らみ始め、期待とともに「玉井先生像」が形成されていった。概して、「期待」というものは危険なものである。期待は容易に裏切られ、期待していた分始末が悪い。しかし、私の期待は裏切られなかった。実際にお会いした玉井先生は期待を裏切らないどころかそれ以上の先生であっ

た。教育・研究ともに非常に熱心でバイタリティにあふれ、とりわけ院生の指導は丁寧懇切にして下さっていた。私たちにとって必要とあらば、院生を集めてそれぞれの段階に合わせた指導が幾度も行われたし、玉井先生の研究室で研究や就職に関する個人的な相談をする学生の姿をしばしば目にしたものである。もちろん私も例外ではない。

今から思うと、玉井先生のアドバイスは常に一貫していたように思う。それは、「立ち止まることなく、真っ直ぐ真摯に研究に励みなさい」というものであった。この言葉は学生への励ましであるだけでなく、玉井先生自身のこれまでの研究者としての生き方を物語っているように私には思われた。おそらく、どんなに大変なときでも決して立ち止まることなく、努力し続けて来られたに違いない。私の場合、しばし立ち止まり怠け心が先立つときもあったため叱られもしたが、目の前に良い手本を生き様として示して下さる先生がいたからこそ何とか乗り越えて来られたように思う。遅々として進まず、完成までに長い年月のかかってしまった博士論文を提出した際には、「おめでとうございます。十年の成果ですね」と言っていただいた。「立ち止まることなく」は「立ち止まっても歩き出し」に、「真っ直ぐ真摯に研究に励み」は「たまには怠けても良いけど、真摯な態度で研究に励み」というふうに私なり変更させていただいたが、立ち止まったまま諦めてしまうことなく、ひとつの仕事を懸命にやり遂げられたことで、玉井先生の信念の重みと意味を理解できたように感じている。

私はこの四月から静岡県立大学短期大学部に勤務することになったのだが、着任してしばらく経った頃、所属先の主任から「大阪大学の指導教官の先生は、とても優しい方ですね」と言われた。なぜご存じなのかと不思議に思っていると、玉井先生が書いて下さった推薦状を読んで、そう感じられたらしい。私自身も応募の際には推薦状を読ませていただいたが、そこにはこちらが恥ずかしくなるくらい身に余る言葉がたくさん書かれていた。私などを誉めるのは大層大変だったに違いないとお察しするが、そこは文学者の筆の力

であろうか、玉井先生は非常に力強く美しい言葉で私という人間を描いて下さった。そこには自分の学生を「研究職に就かせる」という玉井先生が背負って来られた重責と愛情がにじみ出ているように思われた。私自身が忘れてしまっている、あるいは気づいていないようなことへの言及もあり、これまでどれほど学生ひとりひとりに対して心砕いておられたのか、と改めて思い知らされた。この推薦状は私が阪大で過ごした十年間の縮図であるように感じられ、今も大切に保管してある。

玉井先生、長い間お世話になり本当にありがとうございました。退職されましたら、これまで学生のために費やされて来られた時間と労苦を、ぜひご自身のためにお使いになっていただきたいと思います。

（静岡県立大学短期大学部）

玉井先生の言葉

伊藤佳子

玉井暲先生との出会いは、私が大阪女子大学の大学院で先生の、トマス・ハーディの小説『日蔭者ジュード』の講義を拝聴したのが最初です。学部の学生時代に講読の授業で読んだイギリス小説は、ジェイン・オースティンの『高慢と偏見』、オリヴァー・ゴールドスミスの『ウェイクフィールドの牧師』、ジョン・ゴールズワージの『フォーサイト家物語』などであり、どういうわけかハーディ小説とは余り縁がありませんでした。しかし先生の講義は、とても強いインパクトを持つものであったからこそ、それまでハーディという作家にそれほど強い関心を抱いていなかった私が、修士論文で『ジュード』を取り上げてみようという気持ちになったのだと思います。その後、大阪大学の博士後期課程で学ぶ機会を得ましたが、談話会の研究発表に際して、先

生からいつも正鵠を射たコメントをいただいたことは、特に学会発表を間近に控えているときなど、どれほど有難かったことでしょう。そのようなことを考えますと、先生に対する感謝の念は尽きません。

私は大学卒業後高校教員になりましたが、新任研修の場で言われた、「教育は流れに文字を書くようなものだ」という言葉が、他のことはすっかり忘れてしまっているのに、妙に心に残っています。それと同じように、先生が学生に言った言葉が何年も経ってから心に蘇ってくるということはよくあるのではないでしょうか。私も、玉井先生が、特に改まった席ではなく、普段何気なくおっしゃったことをふと思い出すことがあります。そのひとつが、「僕は目前のことに最善を尽くします」という言葉です。一見当然のことのようですが、何事においてもその姿勢を貫くというのは、口で言うほど簡単ではありません。でも先生は、数年前に大阪大学で開催された日本英文学会はもとより各種の学会等において、また私の知る限り、学内外において、このことをご自身の行動で示されていたように思います。私は学生のひとりとして、そのような先生のお姿を折に触れて拝見することにより、多くのことを学ばせていただきました。そして先生のこの言葉を、物事は同じことの繰り返しのように見えることはあっても、どのひとつとして同じものはなく、それぞれは繰り返しのきかないものであるから大切にしなければならないというように解釈しています。そして先生のこの言葉を聞いたとき、いつか目にしたウォルター・ペイターの 'Be perfect in regard to what is here and now.' という一句や、ハーディの詩の一句 'O make the most of what is nigh!' のエコーのように聞こえたのですが、それは私ひとりの思い過ごしにすぎないのでしょうか。

玉井先生はこれまで数多くの論文を書かれ、また著作を出版されていると思います。私がハーディ小説で描かれている自然や風景に関心を持っていた頃、図書館で偶然出会った先生の書物のひとつに、タイトルに惹かれて手に取った『風景の修辞学』があります。そのなかの先生の論文「ヴィジョンの

なかのローマ —『享楽主義者マリウス』—」は、他書でしばしば引用されていることは後に知ることになるのですが、ペイターについては全くの門外漢である私ですら深い感銘を受け、幾度となく読み返したことを覚えています。また、『トマス・ハーディと世紀末』所収の、玉井先生の論文「リトル・ファーザー・タイムと世紀末文学 —『日蔭者ジュード』論 —」は、ハーディ研究者の間で言及されることが多いのですが、私の座右の書として、特に論文をまとめようとして難渋するときなど、私に指針を与えるものとなっています。なぜならそのなかでは、先生がいつかおっしゃったこと、つまり、作品を論じる場合には、他の人が気づかないようなパッセージに注目し、作品のなかからそのような箇所を二、三抜き出して強く照射すること、それが見事に実践されているからです。そればかりか、論の構成が起承転結になっていて、さながら一大交響曲の趣を呈しています。私には一生かかっても、先生の『ジュード』論のような素晴らしい論文は書けないでしょうが、たとえ一歩でも半歩でもよい、私が理想として高く掲げるものに少しでも近づくことができるよう努力したいという気持ちを読む度に掻き立てられます。

また先生は、批評理論の演習の時間に、「自分の temperament で読む」ということをしばしばおっしゃいました。そのことで思い出すのは、ハーディが三人称で書いた自伝『トマス・ハーディ伝』のなかで述べていること、「カーペットを見ているとき、一つの色を辿っていくとある模様が浮かび上がってくる。別の色を辿ると別の模様が浮かび上がる。それと同じように、人生の観察者は、雑多なもののなかから自分の個性に合う模様をよく見て、それのみを描けばよいのだ」という一節です。文学作品を読むとき、自分の temperament、自分の個性を大切にしてゆけばよいのでしょうが、私などは努力が足りないせいか、カーペットの自分の模様が容易に浮かび上がってこないのが悲しい現実です。

玉井先生は、学生の教育に当たっては、私たちの自主性を重んじ、過度に干渉されることなく、少し離れたところからいつも温かく見守ってくださっ

ていました。先生から教えを受けた十年余りの歳月を振り返りながら、このようにとりとめもなく書き連ねてきましたが、先生の温かいお人柄に接して指導を受け、この大阪大学で第二の学生生活を送ることによってハーディ研究の礎を築くことができたのは、私にとって最高の幸せではなかったかという思いを今強くしています。

（神戸市外大非常勤講師）

玉井教授との思い出

高　橋　信　隆

私も玉井教授の学識と人柄に魅せられた者の一人であり、先生への感謝の気持ちを込めて、このエッセイを書かせて頂きます。

私が玉井教授に初めてお会いしたのは、大阪大学大学院に入学する前の時期に遡ります。私は大阪大学大学院に入学する前は、関西学院大学大学院に在籍していたのですが、その時、イギリス文学特殊講義という専門科目が設けられていました。その特殊講義の担当講師が、玉井教授でした。私はヘンリー・ジェイムズを主に研究していますので、アメリカ文学専攻ということになりますが、ジェイムズのイギリス的な側面に興味があった私にとって、その特殊講義は刺激的なものでしたし、当時のノートを読み返す程に今でも私の研究の糧となっています。講義の内容はウォルター・ペイターやオスカー・ワイルドといったイギリス世紀末文学を代表する作家の作品論や思想を綿密に分析するものでありましたが、私は玉井教授の明晰な論証と学識の幅広さとに魅せられました。私が大阪大学大学院に入学したのは、玉井教授とのそのような出会いのためであり、それゆえ、もし特殊講義を受けていなかったなら、大阪大学大学院に進学していなかったでしょうし、現在の私もなかっ

たでしょう。

玉井教授の魅力は、研究者としての側面にだけではなく、教育者としての側面にも見られます。講義を柔軟に展開させる話術にも、私は大いに感心させられました。各受講者の関心に合わせて、適宜、話題を変えることは、不器用な私のような者から見れば、曲芸技のように思われ、教育者として精進を積み重ねなければならないという気持ちを新たにします。受講者の関心を十分に踏まえた上で講義を進める玉井教授の姿勢には、大いに学ぶべきものがあると言うことができます。

前述のように、私はアメリカ文学専攻です。そのため、玉井教授から研究指導を受けることを認めて頂けるかどうか心配でした。しかし、私のそのような不安は、杞憂でした。異なる分野を専攻する者も受け入れてくださるところにも、玉井教授の寛大さが表れています。在学中、玉井教授から頂いたお言葉として印象に残っているのは、「研究は、純血ではなく、異種混交でなければいけない」というお言葉です。このお言葉は、様々な意味として解釈できるでしょう。私としては、一つのテクストが様々なテクストの集合体であるように、一つの研究分野もまた、他の様々な研究分野から成り立っているというように、敷衍的に解釈しました。イギリス文学を学ぶ者とアメリカ文学を学ぶ者とが相互に交流するところが阪大英文学研究室の良き伝統の一つであると思います。玉井教授も、そのような伝統を引き継いでいる方であると思います。

大阪大学大学院での演習と講義からも、玉井教授の柔軟で明晰な思考が伝わってきました。特殊演習は、受講者による発表形式とそれに対する先生のコメントや解説から成り立っていて、難解な批評理論の論文でもクラス全員で討論することによって理解しやすくなったように思われます。討論形式の授業に慣れていなかった私にとって、入学当初は、当惑の連続でしたが、徐々に討論に参加できるようになりました。そのように討論の輪の中に入っていくことができたのも、玉井教授からの指名があったからだと思っています。

討論の意義は、博士論文作成演習（通称、談話会）においても、実感できました。玉井教授だけではなく、他の先生方との刺激に満ちた議論は、研究の方向性と位置づけを確立する上で有益でしたし、最新の研究動向への目配りを怠らないようにすることの重要性を私も含めた院生各自に認識させるものであったと思います。談話会の意義は、先生方からだけではなく、院生からもコメントや質問を受けることにもあると思います。専門としていない作家や作品の解釈から、刺激を受けることも度々でした。研究発表に対する玉井教授のコメントは、私の研究内容を見抜いていると思われる言葉に満ちていて、その洞察力の鋭さには驚かされるばかりでした。私も、将来的に、他者の研究内容や意見を深く理解し、的確にコメントできるようにしたいと思いますので、日々、研究に精進したいと思います。講義も、私にとって、大変興味深いものでした。文学作品だけではなく、イギリス絵画をも扱う講義からも、玉井教授の関心の広さを実感することができました。

上述のように、玉井教授は、私に研究の面白さと学問的手続きとを教えてくださいましたが、英文学研究室のメンバーの親睦を深めるためにも大変尽力されていたと思います。そのような点からも、玉井教授の温かいお人柄を知ることができます。私は、数回、研究室主催の旅行に参加しましたが、先生が参加されているだけで旅行全体が明るく楽しいものとなったと確信しています。宴席でも、勉強以外のお話をお聞きすることができ楽しかったです。大学院は、学問を究めるための場でありますが、研究室のメンバーと交友を深めることも大切だと思います。研究を続けていると、孤独に感じることもありますが、そのような時、悩みを打ち明けることができる院生や先生がいると安心ですし、研究に意欲的に取り組むこともできます。学問を通して多くの院生や教官が交流し、学問仲間の輪が出来上がる様子は、玉井教授の授業から学ぶことができましたし、修了してからも非常に新鮮な印象として私の脳裏に焼き付いています。

玉井教授のお人柄と教育姿勢とを一言で要約するなら、それは、輪である

と思います。教授と話していると、どういうわけか元気が湧いてきます。その理由は、教授の明るさにあると思っています。苦しい状況であっても前向きに物事を捉えることがいかに大切なのかが、教授との出会いを通して認識できたように思います。博士論文の執筆過程で停滞しがちな私が博士論文を完成することができたのは、前向きに物事を捉える習慣が身に付いていたからであろうと思います。教授のお言葉の中で印象に残っているものを一つ挙げるとすれば、それは、「宙を見上げていても、何も生まれてこないよ」です。思案して立ち止まっているよりも、行動を起こす方がよいという思考法は、これからも私の人生を支えてくれるだろうと確信しています。

（和歌山大学非常勤講師）

柔軟に、情熱を秘めて

― 玉井先生への謝恩に寄せて ―

市　橋　孝　道

「受験票も出してください。一応、面接らしくしとかんとね。(笑)」

玉井先生との出会いはこの意表をついた一言から始まった。国立大学の大学院。受験者として最初に面接に臨む僕は、緊張からくる震えを必死で堪えていた。しかし、にこやかに面接の手筈を整える先生は、この笑いを誘うような一言でガチガチになった僕を打ち解かし、その場に安心感と気安さをもたらして下さった。それまでにも他の大学院を受験し、面接に臨んでいた僕にとって、重要な場面でのこの意外な一言は今でも忘れられない。想い起せば、この一言には玉井先生のお人柄が本当によく表われていたように思う。形式的な手続きや事務的な書類を処理する仕事が多い環境で、ストレスを微塵も顔に出さず、柔軟に明るくそれらに対応し、熱意をもって職務をこなされる姿勢。その背中で語られる教えは、演習や講義で語られる言葉と等しく

僕には大切なものだった。他の大学院の面接では、一次試験のペーパーテストの出来具合や願書に書いた志望動機だけが主に質疑の対象だったのに対し、阪大大学院の面接ではこれらに加え、玉井先生が進行役となり、家族は院での研究生活を支援してくれるのか、修了後はどうしたいのか、まで尋ねてくださった。このような人間味あふれるあたたかい面接の雰囲気に、僕は緊張の中にも親しみを感じ、自分の今後の人生は是非ともここで面倒を見てもらいたいと強烈に思ったものだった。実はこの話は、僕が博士課程三年の際に、新入生歓迎会で院生代表のスピーチとして語らせてもらったことがある。この後、一人の後輩から「私も同じことを面接で感じました」と聞いた時、やっぱりこれこそが阪大英文研究室の特質なのだろうと強く確信した。

先生が停年で退職される。僕の年齢に近い年数を英文科に勤められてきた先生が。その最後の約十年間、玉井先生にご指導をいただけたことは僕にとって最大の幸せだった。今思えば、先生に教えをいただいたこの約十年は、英文研究室にとっては激動の時代だったように思う。僕が修士一年の年は、いよいよ玉井先生が中心となり英文研究室を導いてくださる年でもあった。夏休み中に図書館が改築され、研究室の書籍を先生方や先輩方と共に、額に汗して運んだことを思い出す。秋からは服部先生が着任され、さらに活気あふれる研究室作りが推進された。翌年は研究室自体の大改築が敢行され、本館四階にも研究室が設けられると同時に、春・夏の研究室旅行も数十年ぶりに復活。学部生・院生、そして先生までもが気軽に交流し合い、楽しく集ったり、真剣に研究をしたりして知的に刺激し合える環境が拡充した。私事で恐縮だが、修士論文の作成中に母親を亡くし、意気消沈した僕を激励して論文の完成にまで導いてくださったのも、玉井先生を始めとする研究室の先生方や院生の皆様だった。博士課程に進学してからも、研究室の動きは勢いを増し、ホームページの開設、*OLR* の ISSN 取得やレフリー制度導入といった革新から、片渕先生の着任、第 76 回日本英文学会の現地校開催、また日本英文学会関西支部の立ち上げにまで至った。学会の開催や創設では、不慣れな

事務仕事を研究室にいるみんな（先生方も含む）で協力し、マイクや張り紙を持って、額に汗しながら大学のキャンパスを走り回ったことを昨日のように思いだす。毎年のことながら、新入生歓迎会や送別会、研究室旅行、阪大英文学会、論文作成演習（通称：談話会）の学期ごとの打ち上げ、さらにはフォーラムや各種研究会後の飲み会など、研究室での思い出は尽きることがない。そんな阪大の英文研究室は玉井先生のお人柄を反映したような場所で、そこに集う人間が和気あいあいと語り合い、研究や大きな行事には全員が一丸となって情熱を注ぎ、常にひたむきな姿勢で邁進していくところであった。小学校よりも長い年数を通ったこの大学院の研究室が、それまでの人生で一番居心地のいい学校の居場所だと感じたのは僕だけではないように思う。僕以外にもここに通い詰める先輩や後輩をたくさん知っているからだ。

玉井先生への感謝の気持ちはこの限られた紙面では表現しきれない。研究発表に対する談話会後のコメントや演習で授けていただいた知識は数知れず。それ以外にも、研究室の備品に対する心配りから、院生の就職に関する世話まで、本当に心づくしの指導をしてくださった。論文や研究発表の応募原稿を読んでくださる時は、一字一句に至るまで、それも数度にわたって見ていただき、留学や就職で推薦状が必要な時はどんなに忙しくとも快く作成してくださった。研究発表の応募や論文の投稿などでは僕自身の力のなさで必ずしも良い結果に終わるとは限らなかった。しかし、そうした場合でも決して頭ごなしに叱りつけることなく、あたたかい慰めの言葉で激励し、再度研究を見つめなおしてより良きものになるよう導いてくださった。今思えば、多くの障害に出くわしながらもこうして挫けずに研究を続ける意欲を持っていられるのは、このような先生の温厚で繊細なお人柄と内に秘められた教育と研究への情熱に支え続けられてきたからだろう。今はただ、いつか先生への恩返しとして、少しでもまっとうな研究の成果を発表できる日を夢見て机に向かう毎日である。

（大阪大学大学院・英米文学・博士後期課程修了、現ロンドン大学留学中）

玉井先生との思い出

森　本　道　孝

玉井先生の退職記念号に、私のような若輩者が何か文章を寄せるというのはいささか荷が重いような気がするのですが、失礼を承知でこれまでの思い出を思いつくままに振り返らせていただきたく思います。私が玉井先生と出会わせていただいたのは、今から十年余り前のことであります。大阪大学の学部生となった私は、二年生の時に先生の講義を受講させていただきました。当時から非常にできの悪い学生であった私は、講義の細かな内容をまだそれほどしっかりと理解できていたわけではありませんでした。そんな私でも、先生の文学作品に対する強い思いを感じたことと、それから授業の最初と終わりに学生に対して軽く頭を下げておられる先生のお姿に気がついた時に非常に感動したことを覚えております。学生に対する、あるいは講義に対する先生の熱意を象徴する出来事であるように思えたからです。

その後、私が大学院に進学してからは、研究室の業務などに関わらせていただく機会が増えたこともあり、玉井先生とお話をさせていただく機会が大きく増えました。先生は、授業における時間だけではなく、それ以外の学生とのふれあいの時間をとても大切にされているように思います。学生にとって、これほど嬉しいことはありません。教育に携わっていくものとして学ばなければならないと感じました。その中でも、研究室旅行にご一緒させていただいたことは、強く印象に残っております。当時私が持っていた教室でのまじめな印象とは少し違って、和具では釣りに熱中されるなど様々なイベントを心から楽しんでおられるお姿を拝見すると、ご一緒しているこちらまで嬉しくなったことを覚えております。また、某テーマパークへご一緒した時には、我々と同じくらい、あるいはそれ以上に楽しんでおられたのではない

かと思います。様々な責任のある仕事でお忙しい日々を過ごされている先生にとって、我々と過ごす時間が癒しとして大切なものであったのかもしれません。

また、研究室の業務に関しては、様々な機会にいろいろとお話をさせていただきました。先生は、組織の上に立つ「長」として、必ず全体に眼を配っておられます。我々学生の動きや、仕事振りについてしっかりと見ておられるのだと思います。私自身、様々な機会に集団を動かすことの難しさ、目配りの大切さを実感しておりますが、玉井先生は非常に的確に学生一人一人の長所を生かし、あるいはやる気を引き出してくださっているように思います。一例として私自身のことを挙げますと、阪大英文学会などの案内状の発送作業などの際には、「森本君、こうするのはどうだろうか。」と、私に必ず声をかけていただいていたように思います。おそらく、私がこういう作業を仕切らずにいられない性格であることを見抜いておられたのではないかと、密かに振り返っております。また、このようなことからなのかわかりませんが、大阪大学が日本英文学会の開催地になった際には、全体を仕切る総合案内に私を配置してくださいました。このことは、私のやる気を出させただけでなく、私に大きな自信を与えてくれる経験となりました。本当に感謝しております。英米文学研究者としての玉井先生がすばらしいのはもちろんですが、このように先生の教育に対する姿勢を間近に見てきたものとしては、「教育者」としての素晴らしさを感じずにいられません。このような思いは私だけではなく、研究室の学生みんなが感じているものだと思います。

学生研究室に我々が集まっていると、おそらくお忙しくてお時間のない中にもかかわらず、必ずお声を掛けていただいて、色々とためになるお話をしていただきました。これまでの研究室の歴史や、諸先輩方の優れた業績のお話など、どれも印象に残っています。日々のこのようなお声掛けのおかげで、研究において何かにつまずいた時などに、我々は玉井先生の研究室を訪れやすくなっているのではないかと思うのです。どのようなときに行っても、先

生は快く迎えてくださって「まあ、ここに座って」とソファに案内してくださいます。これが楽しみでもありました。先生は、学生を本当に大切に思ってくださっていると感じることが多いです。還暦をお祝いさせていただいた折には、学生から落ち着いた赤い色の入ったカフスを贈ったのですが、非常に喜んでいただき、プレゼントを選ぶ一員であったこともあって嬉しく思ったことを思い出します。

ここまで、僭越ながら、思い出を思いつくままに書き連ねてしまいました。まだまだ、玉井先生とともに大阪大学文学研究室で過ごさせていただいた思い出は尽きません。ただ、私事ですが、玉井先生がご退官で研究室を去られるこの年度に博士論文を提出して、時を同じくして私も研究室から離れることになったことが、これまでお世話になったことへの恩返しとなっていればと切に願う次第です。最後に、日本英文学会や大阪大学文学研究科英米文学研究室などのさまざまな活動における玉井先生のこれまでのご尽力に対する敬意と感謝の気持ちと、それから先生の今後のますますのご活躍への祈念を示して、私の思い出エッセイの結びとさせていただきます。

（近畿大学非常勤講師）

院生よ、論の棟を高くあげよ！

仲　渡　一　美

初めてお会いしたのは六年前の秋のことである。博士課程後期の院入試を受けるにあたっての面談に臨んだときだった。研究室のドアの外まで抱えていた緊張を、先生はあの何とも魅力的な笑顔ですぐにほぐしてくださった。Dylan Thomas にも触れながらユーモアを交えていろいろお話してくださったのである。これまでのお粗末な研究生活、仕事との両立などに関わる諸々

の不安、何よりも私は試験を受けさせていただけるのだろうかという心配が、ぜひここでもう一度学びたいという思いに変わった。それから約半年後、嬉しい知らせが届き社会人で学生という生活が始まった。教えながら学ぶのは自分なりに大変ではあったが、あたたかいお人柄の敬愛する先生方に英米文学を学べる上に優秀でおもしろい院生のみなさんと出会う僥倖に恵まれた。そしてもう一度学生気分が味わえる、忘れかけていた教室での学生の気持ちもわかるという特典つきのほんとうに充実した六年間となった。

玉井先生の授業の一つは木曜2限の「批評理論」に関するものであった。これは先生が『英語青年』他でお書きになってらっしゃるように、「基本的には、学生には批評理論を教えることはできない」ことを大前提にされたものである。なぜなら「批評が批評家みずからのコミットメントを不可避的に前提とする以上、それだけに、そうした性格をもつコミットメントを教えることはできない」からである。学生みずからのコミットとチョイスに委ねるために、あまり細部にこだわりすぎることなくそれぞれの理論のエッセンスをとらえる授業であった。院生の要旨発表をもとに先生は名司会者ぶりを発揮されながら、いろいろな角度から院生たちのコメントを引き出し、最後に様々な理論へのアプローチの手がかりを与えてくださるのである。たしか、Peter Barry の Reading for the Plot を読んでいるときだったが、私は Georg Lukács をジョージ・ルーカスと読み違えて発表してしまった。遅れてきた学生への親心（？）か、先生がそっと見逃してくださったのも今では恥ずかしながらもなつかしい一年目の思い出である。

談話会の玉井先生はなんて言うのだろう、発表者にもいまだ見えざるものをゆるやかに探しだそうとしてくださっていたように思う。少し斜め上に視線を向けられながら「えー、〜さんの発表はそのー、つまり何ですかー、〜ですね」と問答を通して最後に発表をまとめてくださり、温かく、時に厳しく今後の論の発展を促してくださるのである。英米文学、理論や文学全般、他の分野の広範な知識をふまえて学術的に評してくださるのに、その語り口

がどこかユーモラスで私たちは何度くすくす笑ったことだろう。このころの談話会は以前に比べてかなり穏やかな雰囲気になったとのことだったのだが、それでも私は、研究発表を先生方や院生の方々に聞いていただきアドバイスしていただくというこの貴重な経験の場に、ほとんど注射を打つ前の小学生のような気分で臨んでいた。先生の、どこか生かしどころを見つけて研究を面白がらせてくださろうとする姿勢は、道遠しと感じている者にとって大いなる救いであった。あるとき、M１の院生の発表についてのご自分のコメントの最後に、この研究は自分にとって「面白い？」とふと問いかけられたことがある。その意外さと何とも言えない間合いと親しい口調に例によって笑い声が漏れたのだが、私にはその後も心に残る問いかけとなった。先生が私たち学生に伝えてくださろうとしたものは、対象に真に向きあう知的好奇心であり、面白がる限り続く学問の可能性であったのではないかと、あの教室の窓の外の木々の緑を思い出しながら、今感じている。

課外の先生はどうであったか。学会など行事に関しては、さながら阪大英文科というオーケストラを率いる名指揮者と言えるかもしれない。何人かのコンサートマスターを選んで適切な指示をされ、細やかな気配りをされながら滞りなく演奏が華やかに終わるといった感じであった。研究室に論文やほかの相談に伺ったときの先生は、学問のみならず人生の師でもあった。論文を家に例え、その棟を高くあげよといつもおしゃってくださった。それは先生ご自身の学問に対する姿勢を反映した言葉だったのかもしれない。英文学を語るとき、いつも柔和な先生の眼がときおり青く澄んで光るように感じられる。目の前に高くそびえる棟は、私にとっては先生そのものでもあった。どんなときもくさらず楽しんでやっていくことが肝心ともおっしゃってくださった。ときにゆったりと風に吹かれて「無理な緊張には色目をつかわず」という意味で「ふまじめも肝心」と勝手に解釈させていただいている。

打ち上げや飲み会でも先生は愉快にお酒を嗜まれる。アカデミックな話も世間話も先生が語られるとワクワクするものとなる。最近では、性格と論文

に関する先生独自の理論がすとんと腑に落ちた。ほのぼのと思い出し笑いをしてしまうのは、集中講義に来られた東京大学の阿部公彦先生を大阪ツアーに案内されるのに同行させていただいたときのことである。通天閣にのぼってビリケンさんに会い、法善寺横丁でたこ焼き（各自で焼くことができて楽しい）のついた懐石をいただいた。オックスフォード留学時代のお話のあとに野球の話になり、阪神タイガースの監督に話題が及び、あの時は誰だったかなどと思い出せないでいると、先生から次々と歴代監督の名前がとび出した。マニアックなまでにご存じなのだ、やはりこれはただならぬ才能の表れか。それはすべての博識さに通じるのかもしれない。「いや、あのときはねー、〜ですよ」とおっしゃることが何故か可笑しく阿部先生も笑い出してしまわれ、楽しい時間をすごさせていただいたことが今も新鮮によみがえる。

そんな先生が締め切りぎりぎりに仕上げた論文の教務課提出に、談話会の時間が迫っているにもかかわらず最後まで付き添ってくださったのはこの6月のことである。先生の教え子に対する思いはここに集約されているような気がした。阪大で先生のもとで、先生が阪大を去られる最後の年まで学ぶことができた実感がこみあげてきたひとときだった。先生はこの阪大でどれだけ多くの教え子を巣立たたせてこられたのだろう。その一人一人がきっと今も先生の笑顔に勇気づけられているにちがいない。このときも先生はあの笑顔を見せてくださった。それはきっと先生の多年のご功労とともにあったものなのだ。私にとっても感謝してもしきれない、いつも前へと向かわせてくれたものなのだ。お可愛らしいなどと言えば叱られるだろうが、先生を語るときまず思い浮かぶのはやはりこの笑顔なのである。

（近畿医療福祉大学教授）

ターニングポイントに立って

関　　良子

私は大学院博士前期課程から大阪大学に在籍しましたので、玉井暲先生にご指導いただいて、約6年半になります。この秋、私は博士課程を修了し、また、誠に幸運なことに、新たな土地で教壇に立てることになりました。長い学生生活を終え、講師として学生を教える立場となった今この瞬間は、私にとって、おそらく一つのターニングポイントになるのだと思います。もちろん、ターニングポイントとは、ある程度の時間が経ってから振り返って「あの瞬間がそうだったのだ」と認識すべきものだとは思いますが、今回、玉井先生のご退職にあたり、*OLR* でエッセイ集を企画されるということですので、これを契機とさせていただき、私にとってもう一つ前のターニングポイントだったと思われる、阪大への進学から現在に至るまでを、自らへの反省と、玉井先生への感謝の念とともに、振り返ってみたいと思います。

現在、私がヴィクトリア朝詩の世界に魅せられ、研究者として幼い足取りながらも一歩を踏み出すことができたのは、今思うと不思議な偶然の積み重ねであったような気がします。というのも、学部時代の私は（今頃こんなことを告白すると叱られそうな気もしますが）ヴィクトリア朝文学を、あまり読んだことがなかったからです。また、英詩を専門に研究するようになるとは、正直なところ、思ってもいなかったことでした。

「中世的なもの」やフォークロアに漠然とした興味をもっていた私は、大学時代、中世アーサー王ロマンスを講読するゼミに所属していました。しかし、大学院への進学を考える際、もう一度、自分の関心を振り返ってみると、私が興味を抱く「中世的なもの」とは、中世の時代そのものというよりも、後の時代、特にヴィクトリア朝時代に構築された概念なのではないかという

ことに気づきました。そして、ヴィクトリア朝文学がご専門の先生のおられる大学院ということで、大阪大学大学院への進学を志したわけです。今、古いファイルを引っ張り出し、大学院出願時の志望理由書を読んでみると、「Medievalism の視点からイギリス文学史・文化史を見つめ直したい」と書いており、何とも大きな風呂敷を広げたものだと、自分の無知と大胆さに恥ずかしい思いがします。

さて、いざ大学院へ進学するとなると、気がかりだったのが入試についてです。特に、私が心配でならなかったのが、あの阪大独特の出題形式ともいうべき「次の詩について、（イ）和訳し、かつ、（ロ）この詩を評釈せよ。」という問題でした。そこで、受験勉強のようなかたちで多くの英詩を読み、訳し、解釈していたところ、どういうわけか英詩の魅力に惹きこまれ、さらに英詩の研究をしたいとまで考えるようになりました。今思うと、入学を前にして、このとき既に、玉井先生の指導方法の、さらに大きく言えば阪大英文科の学風の恩恵を得ていたのかもしれません。筆記試験がパスすると面接試験へ。極度の上がり症の私が緊張しながら面接室に入ると、先生方が温かく迎えてくださったこと、初めて訪ねる研究室であり、かつ、入学試験の場であるにもかかわらず、不思議とリラックスした気分になれたことを思い出します。このリラックスした気分というのは、入試面接のときだけに限らず、その後の大学院生活で一貫して感じることのできた気分でした。それは、玉井先生が常にどんな局面にあっても、私たち院生にとって風通しのよい研究室であるよう、気遣ってくださったお蔭だと思います。

玉井先生の授業は、先に言及した院試の問題と同様、常にわからないことをわかろうと努力し、その過程で何となくそれに惹きこまれてしまう―そんな場だったような気がします。文学批評理論を読む大学院演習では、特に前期課程のころは、予習をし、批評の要点と思われる部分をノートにとり、頭の中には「？」がいっぱいのまま授業に臨み、授業を受けた後に少しでも「？」の数が減ると嬉しくなるという、何とも初歩的なレベルながらも、私

なりに文学理論との接触を楽しんでいたように思います。講義・演習に共通して思い出すのは、玉井先生の授業の期末レポートを書くのにいつも苦労したということです。玉井先生が出題されるレポート課題は、シンプルながら「わかったつもり」という状態では指定の字数を埋めることのできない内容でした。「あなたはこの一学期間で何を学びましたか」と先生から改めて問われているような気がして、いつも格闘し、期限ぎりぎりになって仕方なくその帰結を提出していたように思います。

後期課程に進学してからは、文学研究や研究方法だけでなく、研究に対する姿勢や研究者としての倫理などについても、折に触れて教えていただきました。私は *OLR* 第 44 号のときの編集委員を担当しましたが、このとき玉井先生は、*OLR* の体制にいくつかの改革を提案してくださいました。一つは査読制を導入すること、もう一つは *OLR* の献呈先リストを一新させることです。前者は、*OLR* 執筆者の研究業績を考えた場合、査読付のジャーナルにした方がよいとのご配慮から、後者は、より多くの研究者の方々に *OLR* の存在を知っていただき、論文を読んでいただくのがよいとのお考えからのことです。その 2 年前には、*OLR* を ISSN 登録するようにも働きかけてくださっており、これら 3 つの改革を通して、玉井先生は、院生の中で少し惰性的になりがちだった *OLR* の体制に、風穴を開けてくださったのです。これらの改革に乗じて私は、*OLR* の執筆料が学生としては高額なので少し減額させていただけないかと、玉井先生に交渉に伺いましたが、これについては「論文を発表することへの責任を実感するためには、*OLR* の執筆料制度は必要」と却下されてしまいました。ですが、今思うと、これを機会に、ただ論文を書くだけで満足してはならないこと、論文とは読んでくださる人がいてこそ価値があること、論文を発表することに対して責任をもつことなど、研究者としての基本的な倫理を教えていただけたような気がします。

今年 6 月に博士論文を提出した翌日、教員採用に応募していた高知大学より書類審査通過の連絡が入り、急遽その一週間後に「英米文化史」の模擬授

業を行なうことになりました。授業のテーマとして選んだのは、「アーサー王伝説を通して見る英米文化」。考えてみると、これは阪大への出願のときに志望理由書に書いた内容と、さほど変わらず、冒頭では「ターニングポイント」と表現しましたが、どうも大学院に入学したときと同じスタート地点にいるような気がしてなりません。就職面接の前夜、やはり6年半前と変わらず緊張していた私に、玉井先生は次のようなメールで励ましてくださいました。

一つ、アドヴァイス。

授業は、学生にとって興味を引くものにする必要があります。アーサー伝説のなかで、どのテーマ、どの部分が面白いのか、その点を考えて、メリハリの利いた授業をされることを期待しています。

そして、あまり、機械に頼り過ぎないことです。先生の口から発せられる声と、そのときの身体的振る舞いのすべてが学生に大きな感激を与えるのです。ですから、力強く、堂々と、明るく、授業をされることを願っております。

では、健闘を祈ります。

玉井先生がご助言くださったような「学生に大きな感激を与える授業」が果たしてできるようになるか、心許ないところもありますが、学生と時間を共有し、ともに何かを「わかろう」とする場を大切にしながら、今後、研究・教育に励んでいきたいと思います。

（高知大学専任講師）

ダンディとその弟子

乙黒（中井）麻記子

最近よく思う。自分は結局のところ、我が指導教官、玉井暲先生の影響から永久に逃れられないのではなかろうかと。以下、玉井先生の思い出というより、私の研究足跡というか、投げやりな懺悔と言った方が良い気がするけれども、書く。

学部四年生の初夏、私も人並みに卒論を何で書くか悩んでいた。モラトリアムを求めて大学院進学を漠然と考えてはいたものの、特に文学研究に野望があるわけではなかった。古本屋でいくつか訳本（当然、原書ではない）を購入して読んではみたが、結局選んだのは玉井先生の半期講義（ヒリス・ミラーの批評を読む講義で、難しくて全くもって理解できなかった）で扱ったエミリー・ブロンテの『嵐が丘』だった。もちろん、以前に訳本で読んだ際、理解出来ないなりに感銘を受けたからというのもあったが、単純に原書を持っていたから、というのがこの作品を選んだ一番の理由である。酷い話である。そして夏休み。私の英語力では作品一冊読むのにニカ月近く、論文一本読むのにも数日かかる有様だった。何より致命的なことに、私は文学少女ではなかった。今でも、文学を読むのなんて一種の苦行だと思っている。そんなことだから、提出した卒業論文は相当酷いものだったけれども、自分の考えを好き勝手に書いて良いというのは楽しかった。

修士論文ではサマセット・モームの『月と六ペンス』を選んだ。これも決めたのは書評の一カ月前だった。モームなんていう文学研究においてはマイノリティーに等しい作家を選んだのは若気の至りである。玉井先生には「ブロンテ離れか！」と笑われた。ただ、他にも何人かの方に相談したのが、大抵はモームで修論を書くことには難色を示された。あの頃はまだ現在の密や

かなモーム新訳ブームも起きていなかったし、このとき選ぶ作家でその後の人生が決まると言っても過言ではない選択だったから、反対されたのも当然のことだったと思う。とりあえず、自分のカンと、「好きな作家をやりなさい」という玉井先生のお言葉を信じて、しばらくモームをやることにした。このとき、ご自身もオスカー・ワイルドを研究対象に選ばれた当初は周囲から色々言われた、といったお話を伺って、玉井先生に初めて親近感を覚えた。よく考えると、モームの戯曲はワイルドに多大な影響を受けているのだから、ワイルド研究者である玉井先生の弟子（だと思いたい）がモームをやるというのは、実は自然なことなのかもしれない。

博士後期課程進学後は、順調に文学研究、というよりも寧ろ、阪大英米文学研究室の居心地の良さにどっぷり漬かっていった。玉井先生の批評理論の授業では、現代思想・哲学って結構面白いのでは、と文系院生にはお約束の道を辿り（まあ、あっさりと挫折したけれども）、さらに困ったことに、ある意味では大変素直な学生であった私は、もう一人の指導教官（と勝手に思っている）服部典之先生の影響で、ポスト・コロニアル文学批評なんてものにも興味を持ってしまった。真っ当にモーム論で博士論文をまとめていれば良いものを、ちょっとおしゃれな感じのする「ポスト・コロニアル」に傾倒しかけていた博士後期課程三年目くらいの私に玉井先生はおっしゃった。「中井さん、こういう議論をやろうと思ったらモームだけでは駄目ですよ。最低でも二、三人、もしくはもっと沢山の作家をやらないと。例えばスティーヴンソンなんかどう？」、と。

以後、卑小なる私の運命はこの玉井先生のお言葉に翻弄され続けている。モーム以外に、R. L. スティーヴンソン、R. M. バランタイン、サモア人作家シア・フィギェル、挙句の果てにアメリカ人絵本作家モーリス・センダックなんかにも手をだす羽目になったのは、玉井先生の「汝、多くの作家を扱うべし」という「呪縛」によるものである。ちなみに、情けないことに未だ書き終わっていない博士論文は、この大きすぎる風呂敷をどうやって畳むか

が真のテーマであるといっても過言ではない。とはいえ、多くの作家・作品に目を向けたからこそ、色々と興味深いテーマに出会うことができたのであって、そういった方向性を示してくださった玉井先生には、陳腐な言葉だが、感謝の気持ちで一杯である。もっと言えば、面倒くさがり屋の私は、あのお言葉がなければモーム以外に目を向けることはなかっただろうし、それはそれで閉塞感を覚えて文学研究そのものに嫌気がさしていただろう。要するに、あれは私の気性を見抜いた上でのお言葉だったのだ。有難い話である。

思えば、卒業論文でエミリー・ブロンテを選んだのも玉井先生の講義を受けていたからであった。修士論文も、結局は玉井先生の一言でモームに踏み切った。挙句の果てに、二年ほど前には、成り行きでブロンテ（今度はシャーロットの『ヴィレット』）に原点回帰してしまった。ヴィクトリア朝文学などという巨大な壁には二度と立ち向かうまいと心に決めていたのに、である。玉井先生が愉快そうに笑っておられたのは言うまでもない。

文学研究のメインストリームにちょっぴり反発してモーム研究を始めたつもりだったが、結局私はこの十年間、玉井先生の掌の上でジタバタと足掻いていただけの気がする。きっと、これからもそうなのだろう。今のところ全くそんな予定はないのだけれども、「モーム戯曲におけるワイルドの影響」だとか、「モームにおける唯美主義」だとか、「南太平洋におけるスティーヴンソンの反世紀末」だとか、何かそういった感じのことにもいつかは手を染めるに違いないのだ、私は。玉井先生の思惑通りに。

（茨城工業高等専門学校人文科学科講師）

玉井先生の思い出

金　﨑　八　重

玉井先生の思い出で一番印象に残っているのは、教育者としての姿です。私は学部時代から大阪大学にいるので、玉井先生にはもう11年近く指導して頂いている事になります。

私が玉井先生のお話を初めて聞いたのは、学部一回生の時の共通概説での出張講義でした。文学部共通概説は、まだ学科の所属が決まっていない一年生に対して、各学科の先生が一人ずつ毎週一回、それぞれの学科の説明と勧誘を兼ねた講義をするというものです。玉井先生はその時に、シェイクスピアのソネットの18番について講義されていました。その時の私は、まだ大学に入ったばかりで、詩についても良くわからず、先生があんなに嬉しそうに語ってらっしゃるのだから、面白いものなのかな、とぼんやりと思った記憶があります。

玉井先生の授業は色々と受講させて頂きましたが、その中でも最も思い出深いのは、学部時代に受けた英文学史の授業です。二回生になり、英米文学科に所属する事が決まった私が最初に受けたのが、「英文学史B」でした。なぜ英文学史AではなくBなのか、と思った覚えがあります。チョーサーから始まる英文学史は長く、扱わなければならない作品数も多いので、玉井先生は、英文学史A、B、Cと時代ごとに分けられていました。三年間受ければ一通り終わる計算だというお話をお聞きして、なるほど、と納得しました。

当時は分からなかったのですが、今、授業の資料を見返してみると、数ある英文学作品の中で、授業で扱う作品をとても気を遣って選んで下さっていたのが良く分かります。教科書と抜粋集もあったのですが、先生は授業ごとに、抜粋集に載っていない作品を載せたハンドアウトを作って下さいました。

英文学史の資料は全て取って置いてあるのですが、全15回の講義で、ハンドアウトが25枚あり、イギリス王室系図までありました。英文学を良くしらない学部生が「読んで面白い」と思えそうな作品を選んで、抜粋をハンドアウトにのせ、他の作品、作家は簡単な説明に止め、学生ができるだけ文学に興味を持てるようにして下さっていたのだと、今になって分かります。

英文学史の授業は、テストも独特でした。私は英文学史ＡＢＣと全部受けましたが、テスト問題は、残念ながら英文学史Ｂしか残っていません。ＡＢＣともテスト形式は同じで、「以下に挙げた事項、作家、作品、文学理念などについて、簡潔な解説、説明を解答用紙において3行程度でつけなさい。」というものと、「次のパッセージについて以下の問いに答えなさい。（1）作者名と作品名をidentifyし（原語で記述すること）、（2）その全体を和訳し、（3）引用パッセージについてコメント、注釈をつけなさい。」というものでした。

いつも苦労させられたのが、後者の問題でした。授業で扱った作品から選ばれたパッセージなのですから、訳はなんとなくは分かります。難しかったのは、作者名、作品名の特定です。それが分からなければ、コメントもつけようがありません。特に難しかったのは詩でした。小説は、人物名だの、場所だの、物語の筋だの、何かしら特定できるものがありましたが、詩は分かりにくいのです。今ならば、詩の文体や内容や書き方も詩人によってずいぶん違うのは分かるのですが、当時は分かりませんでした。特に、ロマン派とヴィクトリア朝詩人が大量に授業で扱われた、英文学史Ｃの時のテストは難しいものでした。テスト問題は手元には残っていませんが、マシュー・アーノルドの "Dover Beach" が分からなかったのは今でも忘れられない、悔しい思い出です。玉井先生は、学生がトンチンカンな答えを書いていたのをニヤニヤしながら採点されていたのではないかと思います。玉井先生には、今年になって、先ほど述べた共通概説の講義で私が9年前に提出したレポートを、「（研究室の）引越しの為に整理していたら出てきたよ」と返して頂いたので

すが、この時のテストの解答用紙は二度と発見されないことを願います。

大学院に入ってから、一番心に残っているのは、修士論文で扱う作品を玉井先生にご相談した時のことです。卒業論文をテニスンで書いた私は、そのまま続けるか、別の詩人を選ぶか悩んでいました。エレジーを研究したかったのですが、「テニスンには他に大作エレジーは無いですし、シェリーでもいいのですが、一番好きなのはリシダスです、ただミルトンは、時代もかなり遡るし、何より私には難しいかもしれません」と私が言ったら、「じゃあリシダスにしなさい。修士論文なんだから、ポテンヒットを狙って小さく行くよりは、大きく振りにいった方がいいよ。結果が例えどうであれ、次につながるからその方がずっといい。自分が良いと感じたもので、大きく行きなさい」という言葉を頂きました。「大きく行け」という玉井先生のお言葉は、私の研究の支えとなっています。私は時折ドーンと行き過ぎて、滑っている気がしなくもないのですが、自分の良いと思った作品、テーマを選べ、という先生の教えは、研究する上で、とても励みになっています。

玉井先生とは、研究室以外で過ごした時間も思い出深いものが沢山ありますが、中でも、今年の箱根旅行が一番の思い出です。今年の5月、日本英文学会の帰りに、玉井先生と院生5人とで箱根の温泉に行きました。箱根の強羅温泉は、玉井先生が初めて助手になられた時に、先生が手配され、故藤井先生達と行かれ、又、その20年後、服部先生が着任された時にも行かれた、想い出の温泉だそうです。箱根湯本から箱根登山鉄道で30分程登った、箱根山の山頂近くにある強羅静雲荘は、温泉がとても気持ちよく、玉井先生は二回（三回？）も入っていらっしゃったそうです。風呂上りの玉井先生は浴衣がとても似合っていらっしゃいました。夕食後の部屋での飲み会では、色々な裏話をして下さって、愉快でしたが、この温泉旅行で一番印象に残る事になったのは、次の日の「黒たまご」でした。強羅からロープウェイで箱根湖まで行ったのですが、その途中で大涌谷という所で一度降りました。少し山

道を登っていくと、源泉が沸いていて、源泉の鉄分で殻が黒くなった温泉卵「黒たまご」というものが食べられる所です。その名物を皆で食べ、辺りをブラブラと観光していたのですが、そのうちに玉井先生の姿が消えました。どこに行かれたのか思っていると、先生が黒たまごをもう一パック持って現れました。相当お気に召されたらしく、一人で買いに行かれていたらしいのです。その黒たまごのパックを持った玉井先生は、満面の笑みで、この旅行一番の笑顔でした。私が院に入ってからは、特にお仕事がお忙しくなられ、難しい顔をされることも多くなった玉井先生が、「一つ食べたら7年延命（のたまご）やから、二つなら14年やな」と笑ってらっしゃるのを見て、箱根に来て良かったと思いました。

玉井先生には、研究面はもちろんのこと、事務仕事のやり方や、研究者としてのあり方など、色々な面で導いて頂いたし、今も導いて頂いています。それに見合うだけの自分であれたかな、見合う研究者になれるのかなと疑問に思う事も多々ありますが、何年か後にお会いした時に、そうあれるよう、頑張って行きたいと思います。

（大阪大学大学院・英米文学専攻・博士後期課程在籍）

玉井先生と研究室

中　村　仁　紀

2008年3月、文学部本館の改修工事に伴って英米文学研究室も一時移転のための書籍類の梱包に追われていた。玉井先生のお部屋にも院生が集まり書架整理をしていると、先生が書籍、資料の積山の中からある原稿を取り出し、にっこりと笑って私に「返して」くださった。何かと見てみるとそれは私が学部一回生の頃に受けた先生の講義の課題レポートである。実に9年前

のものであった。テーマはシェイクスピアのソネット 18 番、当時の自分の、文学に対して瑞々しくたらんとして書いた力んだ文章に面映さを感じたことは言うまでもない。ただ個人の感慨以上に私がそのとき感じ入ったのは、玉井先生が阪大英文科で何十年と培われてきたであろう、学生と接する上での細やかな配慮や暖かく見守る目に対してであった。先生はいつも大学院に進む学生のレポートはきちんと保管されているそうなのだが、タイムカプセルのような部屋に眠っていた原稿はまさに、これまで私が学生の身分に甘えて好き勝手な議論を授業や談話会でしたときにも厳しくもどこか寛容な心でそれを受け止めてくださったご指導の数々を改めて思い出されてくれるものだったのである。

研究室の改修が終り新居に移った 2009 年 9 月にも、ある日の夕刻、先生は機を見て、これまでダンボールに詰め込まれていた紀要、雑誌類の点検を一人で行なっておられた。たまたまそのとき私は部屋に居合わせていたのだが、先代の先生方の個人のものも含まれていて玉井先生ご本人で点検しなければいけなかったようで、私の手に余る作業のようであった。ただ、一つ一つ雑誌を取り出しては中身を確認していく手間のかかる仕事を、淡々と、かつ丁寧に見ておられた先生の背中が忘れられない。膨大な量の雑誌を前に苦悶の声をあげながら、時に先生が昔作られた同人誌を私に見せて当時の思い出を感慨深く語って下さったとき、多忙を極めた教授としての立場から一瞬開放された文学青年の姿があったのである。研究、教育のあらゆる方面で精力的に奔走されてこられた先生が、一度立ち止まり、一メンバーとしてご自身も携ってきた英文科の記憶をゆっくりと解きほぐしていくその姿に、今の英文科を作り上げてきた根っこの部分を見た気がした。

思えば、先生はよくその日の大学での仕事を終える際、学生用の研究室に顔を出してはその日一日の出来事を談笑されるか、他の用事でお忙しいときには「それでは私は帰りますのであとはよろしく」と笑顔で一言言われて帰るのが常である。そのときの先生の表情は、「いつも通りの英文科」をご自

分の目で確かめているかのようであった。こうしたアナログで手触りのある先生流の何気ない気配りこそ、私たちが先生からいただいてきた大きな恩恵なのかもしれない。研究室が一新した今、改めて今自分がこの環境にいることの幸甚をかみしめるとともに、先生が退官されてからも遠くから安心してみていただけるような英文科にしなければと未熟ながら身を引き締める思いである。

（大阪大学大学院・英米文学専攻・博士後期課程在籍）

"The Rime of the Ancient Mariner"

馬　渕　恵　里

色々と悩んだ末、英語の教育職員免許状を取りたいから、そして学部在学中に英語圏へ留学することを心に決めていたからという何とも消極的な理由で英米文学専修を選んだ私が初めて受けた英文学の授業が、"The Rime of the Ancient Mariner" を講読するという玉井先生の演習であった。私が大学院に進学してからのここ五年間は特に、文学研究科の中枢としてますますご多忙を極めていらっしゃった先生の毎日を思うと、先生の目の前の席に座って、総勢六名の（この年だけは極めて例外的に受講生が少なかった）小さな演習室で毎週先生と詩を読んだあの演習はかけがえのないほど贅沢な時間であったと今更ながら思う。英文学の「読み方」など何も知らなかった私が、*OED* を引くことから習ったのがこの演習である。当時は今以上に引く「コツ」などわからなかった私は、担当範囲に含まれる全ての単語を書籍版で調べて授業に出ていく有様であった。そんな中で一度だけ、先生がご準備されていた予習ノートにもない引用例を報告するという出来事が起きた。むろんこれは単なる闇雲な「素人引き」の結果、何の変哲もない語義の用例を私が

偶然見つけたにすぎないのであるが、二年生だった当時の私は地味な予習が報われたような気持ちになって（大変次元の低い話ではあるが）嬉しく思ったのを今でも覚えている。

先生と出会ってからの九年間を振り返ってみると、先生はいつもこのような地道な努力を温かく見守り評価して下さったように思う。実際、数年前の学部・院合同新入生歓迎会のスピーチで、先生は「自分には才能があるとは決して思わないけれども、ただ何事も絶対に手を抜かないということだけは常々心がけてきた。その努力がすぐに報われなくても、評価されなくても、そういう姿を見て評価してくれる人が必ずどこかにいる。そういう人がいたからこそ自分はここまでやってこられたのだと思う。だから皆さんもやると決めたこと、やるべきことは絶対に手を抜かないで、粘り強く最後まで頑張ってほしい」とお話しされた。言うまでもなく先生は多分に才能もお持ちであるが、学部生の頃から講義や演習などで鋭い読みを披露する先輩、友人、後輩の発表を聞きながら「私には頑張ることしかできないけれどセンスのある人はやっぱり違うな」と思い、自分に何か取り柄があるとするならば気力と体力だけだと常々感じていた私は、先生のお言葉をお聞きして心が救われる思いがした。今でも落ち込んだ時、行き詰まった時には先生のあのスピーチを思い出しては勇気づけられている。「文学研究の指導者は、どんなものであっても学生の『読み』を受け止めなければならない。そうした上で、その『読み』を、皆が納得できるような、よりよいものにするための指導を行うのが教師の役割であって、程度の差はあったとしても院生全員が入学時より伸びていなければならない」という信念をお持ちの先生にずっとご指導頂けたからこそ、私はここまでやってこられたのだと心から思う。研究に行き詰まりどうしたらよいのかわからなくなってしまった時も、先生は決して頭ごなしに否定することなく「一度見つけた自分のテーマ・関心を大切にしなさい」と励まして下さり、私の拙い発表原稿や研究論文にいつも丁寧に目を通し貴重な助言を与えて下さった。また、とりわけ博士後期課程に進学後の三

年間には、英文学研究のみならず大学教員、研究者として生きていく上で大切な事をたくさん教えて頂いた。"The Rime of the Ancient Mariner" の演習は、先生との出会い、そして英文学研究との出会いという意味において私の原点である。九年前のあの授業から先生はずっと私の "pilot" であった。先生のご退官を前に、私もそろそろ独り立ちしなければと思う反面、何とも頼りないこの船旅をいつまでも変わらずお元気な先生に見守って頂くことができればと切に願ってやまない今日のこの頃である。

（大阪大学大学院・英米文学専攻・博士後期課程在籍）

作品を文学的に読む／感じる／論じる

―「十五分足らず」と玉井先生との思い出―

田　中　和　也

玉井先生との思い出ということですが、むしろこのエッセイにおいては、私の学内・学外生活の状況と、それと並行して玉井先生と結ばせていただいた交流についてお話したいと思います。その交流においては、文学作品を読むことのみではなくて、もっと幅広く〝物事を考える〟ためのヒントを得たように考えております。ただ、その〝ヒント〟を書かせていただくために、私の個人的体験をまずは語ることになることはご了解願いたい次第です。

私自身は、大学院から大阪大にお世話になってきております。ですので、博士前期課程の入試の際はもちろんのこと、新年度ガイダンスや授業初回でもずいぶんと緊張しておりました。特に大学院入試のときですが、私の堅苦しい様子ゆえに、玉井先生たちも少し戸惑っていらした気がします― もっともこのことも、こうして語れるようになったこと自体、良い思い出になりつつあるのかもしれないと思います―。けれども、玉井先生をはじめとし

た先生方や諸先輩方のもと、少しずつ研究室の雰囲気に慣れることが出来たと思いますし、また私も慣れるように努力しておりました。

ですが実のところ、前期課程入学当初の私は、大いに悩んでおりました。詳しくは申せませんが、大学院内部ではなくてその外部で苦しい思いをしておった次第です。これには、家庭の事情もありましたし、何よりも長年の仲間関係での揉め事ゆえでした。その揉め事においては、私は多くの仲間と袂を分ちました。この事件が元で、私は己の進路に惑うことになった—後期課程への進学か、あるいは大学という世界を出るか—という次第です。

その仲間たちというのは、学部学生時代に知り合ったのですけれども、今にして思うと、何と恵まれた日々だったことか。私自身も含めて、悩み多き学部学生時代を送っておりました。しかもその悩みというものは、私にとっては実に衝撃的でした。己の出自、家族、恋愛模様、障碍—私という、高校までの無知で己の殻にこもりがちだった人間にとっては（もっとも、今なお人間的には未熟千万ですが……）、己の無知を恥じると同時に、それら仲間たちによる〝手触り〟ある言葉の一つ一つに打ちのめされることもしばしばありました。しかも、仲間たちは、決して己の境遇に甘えず、前進することを忘れない人々でした。彼女ら・彼らは、人間的に〝腐っていた〟私に、頭でしか物事を考えないようになりつつあった私に、血の通った考えや行動を起こすことの大切さを伝えてくれたように思います。文字通り、時には泣きながら同じ飯を食った間柄でした。

ところが、人間関係というのは、何でヒビが入るのか分からないと思います。前述のように、そうした仲間たちの間でも、齟齬は生まれました。もとより馴れ合いの間柄では無い以上、厳しい言動を交し合うのは常でしたし、日々これ衝突といった間柄だったとは思います。ただ、衝突は衝突でも、同じ飯を食った仲間たちから迫害じみたものまで受けるとさすがに堪えました。そんな中でも、仲間たちの力になろう・守ろうとして、心身が削がれる日々

を過ごしました。当時、私は誰よりも早く研究室に来て、給湯ポットに湯を入れる等をして、授業前に一息ついていました。その一息の際に自分の現状をふと考えて、「ああ、今日も大学に来られた。また、勉強ができる。あるいは、またこうして安穏と、文学という個人的な学問を勉強しなければならないのか」と、安心半分・悩み半分に感じておったことは、今なおはっきりと覚えております。

このように、大学内・大学外でのギャップに、私は悩んでおりました。

こうした中で研究をしようとしても、中々うまくは行かなくても仕方が無い、と今ならば思います。何しろ、作品テクストを読むこと自体さえも楽しめない日も多かったくらいだからです。自分でも、青い顔をしてテクストを読んでいたという記憶があるくらいです。ですがだからこそ、私はテクストを〝楽しむ〟とは何か、テクストを〝感じる〟とは何か、ということを考え直せたように思います。そして、テクストの楽しみ方という点において、玉井先生は実に大きなヒントをお与え下さったと私は考えております。そしてそのヒントは、博士後期課程に進学する直前に、特に明確にいただいたと思います。

前述のように、私は博士前期課程では諸事で悩んでおりましたので、大学院に残ることには大きなためらいがありました。けれども、とにかく入試で自分の力を試してみたい、あわよくば僅かな希望を掴んで博士後期課程へ、研究へと進みたい、という抑えがたい想いがあったのも事実です。ただ、幸い後期課程入試には合格できたものの、自分のように力の無い人間が進学してもかまわないのかと思い、ずいぶんとためらいがありました。

けれども、悩んでも仕方が無いので、玉井先生とお話をさせて頂いた次第です。その際、2月という時期もあり、話題は必然的に書きあがったばかりの修士論文に及びます。私個人は、Joseph Conrad の *Lord Jim* で書き上げたのですが、執筆時に思ったのが「難しい作品だから、読めない箇所が多く

て当たり前。むしろ、下手に格好良い議論をするよりも、自分で感じたこと・思ったことを元にしよう」ということでした。Conrad というと文学史の教科書などでも、「重厚な」とか「人間の悪を描く」とかいった、重苦しい形容がついて回る小説家だと思います。けれども、そういう評価をもつ作家に興味を抱いたからといって、そこに引っ張られなくても良い、と私は開き直ったように思います（どこまで開き直れたのかは、自信が無いですが……）。しんどいときに、作品を重苦しく読む必要は無い。代わりに、私の興味は Conrad 特有の底意地の悪さにある、ならばその Conrad の〝根性の悪さ〟（関西方言で言えば）に目を向けてみよう—こう考えてみたのです。一口で言えば、*Lord Jim* とは重厚な作品だと私は思うのですが、その作品でさえ主人公の Jim を〝おちょくって〟いるところがある、という想いが拭えなかった次第でした。結果私は、修士論文では自分の好きなことを・好きなように書かせてもらったと思います。これは自分でも明確に意識しておりますが、こうした〝根性の悪い〟姿勢も当時の私の状況のゆえだと思います。無論前述のように、事件自体はとても深刻なものでした。けれども、元々不真面目な私なので、「何もそんなに揉めなくても……」と辛辣にも考えて、一人立腹しておったくらいでした。

ただ、こうして好きなことを書いたからこそ、後期課程進学には悩みがあったのは事実です。重厚な作家を茶化すようなことを書いてよかったのか？ 文学史的には、何とも軽薄なことをしたのではないか？ 人として不真面目ではないか？ と考えたからです。

けれども、この話題の際の玉井先生のお応えは、まったく私が想像していないものでした。先生がおっしゃるには、「いや、そうして物事を考える姿勢は、文学的だよ。Conrad を読む人間らしいなあ」正直、自分には今でも文学の感性には自信がありません。けれどもそんな自分でも、〝文学的〟と言ってもらえることがあった—これは、新鮮な驚きでした。同時に、玉井先生の語彙を使わせていただくと、私自身の人間的・批評的 temperament に

少し自覚をもつようにしないといけないと内省した次第でした。思うに、会話開始から玉井先生の口から「文学的」という言葉が出てくるまでには、十五分もかからなかったでしょう。けど、その十五分で、私は己の進路を決めた、進学という道に賭けてみよう、と思った次第です。文学作品を読むことは、何もきらびやかな論をこしらえたり、理論を華麗に使ったりするためではないと思う。むしろ、青臭くても良いから、自分で素直に感じたこと・考えたことを基にして、論じていけばよいのかもしれない。そしてこうして読む／感じる／論じることは、文学研究の基本であると同時に、もっと幅広く〝物事を考えて〟生きていく際の基本なのかもしれない―こういったことを、玉井先生のお話の直後に、思わず考えてしまった所存です。同時に、ようやくこのとき、玉井先生の演習では Jonathan Culler や Joseph Frank など、作品テクストをあくまで文学作品として読むという理論を私ども学生に読ませてきていらっしゃった理由が実感できた気がしたものでした。

こうしたヒントをたった十五分たらずでいただけたこと、それが私の玉井先生に関する最大の思い出・最大の感謝だと思います。

（大阪大学大学院・英米文学専攻・博士後期課程在籍）

阪大のお父さん

三　浦　誉史加

学部時代から数えて 14 年間在学した母校。親元で過ごした年月にも匹敵するその時間を見守って下さった玉井先生は、まさに阪大のお父さんでした。阪大のお父さんは、優しさと院生を思うがゆえの厳しさの両方を持って接してくださいます。勉学を疎かにしたときには叱咤激励を。道に惑って途方にくれたときは、気持ちが楽になる暖かいお言葉を。その時々に必要な言葉を

的確に選び取って、院生としての歩みを進めて下さる玉井先生に導かれた日々が昨日のように思い出されます。初めての学会発表を終えた後、自分を甘やかしてだらだらしていると、「一年歳をとる毎に書くべき論文が一つ増えると思いなさい」と再始動の軌道に乗せて下さり、研究への取り組み方を教えて下さったこと。方向性に迷いを抱えたまま、一時的に楽になりたいがために安易に予備論文を提出しようとした私の浅はかさを諌め、問題から逃げずに真正面から取り組む時間を与えて下さったこと。院生生活の集大成となる博士論文を書き上げる踏ん切りがつかず、提出は一年後でいいかな…とぐずぐずしていると、「そんなのんびりしたことでどうする。3ヶ月後の12月までに必ず書き上げて提出しなさい」とかけて下さった発破。そのお言葉に奮起し、あれほど机の前に向かっても一語も浮かんでこなかったのが、必死に筆をすすめ、不恰好で未熟ながらもなんとか形になったこと。博士論文の提出に必要な書類に記入するため、玉井先生の後について事務室へ続く階段を下りていると、いつのまにか父親に見守られる子どものような安心感を覚えていたそのとき、「院生の博士論文提出に付き添うときはいつも、子供を送り出す父親のような気がしています」と先生がおっしゃり、同じことを考えていたのだなあと嬉しくなったこと。

愛情をかけて育ててもらった雛たちは、成長して母校を巣立った後も、阪大のお父さんを求めて羽を休めに時折戻ってきます。就職しても度々研究室へ顔を出す同期は、「僕は怠け心が出てきたら、玉井先生に叱ってもらいに来るんだ」と言います。あまりにも研究室に入り浸っているので、院生と変わらないじゃないか、と同期を笑っていた私こそが、阪大のお父さんの支えを頼りにしていたことに気づいたのは、就職して数年後のことでした。あるとき、家族に思わぬ不幸が続き、私はすっかり気が動転してしまい、周囲が見えなくなって愚かにも多くの方々に大きな迷惑をかけてしまいました。もう母校に顔向けが出来ない。きっと母校に行っても誰も相手をしてくれない。暗澹たる気持ちになっていたある日、玉井先生から電話がかかってきました。

私は、てっきりお叱りを受けるものと身を縮ませました。しかし、玉井先生は音信不通になってしまった私を叱るどころか、心配して優しい言葉をかけてくださり、暖かく励まして下さったのです。そして、遅れに遅れ、もう提出が許されないと思っていた論文の執筆を促して下さいました。お叱りをうけて当然の局面で、家族のように心のこもった玉井先生のお言葉は、ささくれ立っていた心にしみいり、実家にかかりきりになって研究からどんどん遠ざかっていくことに恐怖感を覚えていた私には、研究への帰り道を作ってくださった玉井先生の頼もしい手に光を与えて頂いた心持がしました。

新米教員として学生と接している今、玉井先生が私たちにして下さったことを無意識のうちに、真似をしようとしている自分がいます。模倣しようとしても形にならない不器用さに惑い、あるべき姿を確認するために舞い戻る子供を、玉井先生はいつも優しく迎えて下さるのです。

（梅光学院大学専任講師）